

無劍の守護戦姫

未薈

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

助けたかった——けど無理だった

許せなかった——けど頼るしか無かった

戦乙女は剣^{抗う力}を失い

代わりに^{受け止める力}盾を得た

共に闘う^{ナイト}仲間を連れて

^{絶対なる力}魔王に抗うため彼らは立ち上がる

さあ、行こう。目指すべき場所はただ一つ

・
・
・

この作品は作者の処女作です

拙い文章ですが、よろしくお願ひします

目次

設定

今さらだが現在の設定をまとめようと思う ver. 零 | 1

零章 始動、無剣の戦乙女

E P. 0 邂逅 | 5

E P. 1 デスゲーム | 22

E P. 2 第一層ボス攻略会議 | 49

E P. 3 意味とは何か | 61

E P. 4 姿無き殲滅者 | 73

E P. 5 無力さ故のはがゆさ | 89

E P. 6 全てはここから始まった | 98

壹章 強化詐欺

E P. 7 髭の理由 | 109

E P. 8 キリトの苦難 | 122

E P. 9 秘められし悪意 | 134

E P. 10 手がかり | 146

設定

今さらだが現在の設定をまとめようと思うver.
零

桐ヶ谷 和人

A・N キリト Lv38

- ・言わずもがな、原作の主人公さま
- ・この小説でも主人公
- ・β時代にも別の相棒がいた
- ・元相棒は行方知れず、正規版にいるかは不明
- ・現相棒はミイナ
- ・原作とは違い、攻略組には入っていない
- ・ボス撃破の黒のフードのプレーヤー
- ・性格は原作通り

???

A・N ツバル Lv18

- ・オリ主(仮)
- ・βテスター
- ・人望も厚く、キリトには劣るものの剣技もトップクラス
- ・武器は片手直剣
- ・冷静沈着
- ・ディアベルとはまた違うリーダータイプ

???

A・N ミイナ Lv35

- ・キリトの現相棒
- ・武器は使えない
- ・ステータスはAGIに極振り、閃光サマも真っ青のスピードで走

る

- ・好奇心旺盛、陽気な性格であり、人懐っこい
- ・姉がいたが2年ほど前に他界
- ・βテストではない
- ・姉の彼氏を恨み続けている
- ・尚、彼氏の顔は見えていないもよう
- ・裕福な家庭に生まれ、育ってきた

???

A・N ユイナ

- ・ミイナの姉
- ・息詰まった家庭が嫌になり、家を出て親戚の家に居候する
- ・両親が自分を死んだことにしたこと逆手にとり、名前を変えて生きてきた

- ・交通事故により他界

・βテスト

・彼氏持ち

???

A・N アリス Lv25

・βテスト

- ・ボス戦の時だけキリトと組んでいたらしい
- ・攻略組には参加せずにキリト達と行動
- ・二人の妹を持つ
- ・性格はサーテイの方

???

A・N シズル Lv19

- ・会議の時に一悶着起こした張本人
- ・キリトを個人的に嫌っている
- ・テストではない
- ・両手剣

結城 明日奈

A・N アスナ l v 1 5

・言わずもがな原作のキリト君の正妻様

・原作通り

・キリト達と合流はしない、しばらくツバル達と行動する

・細剣

???

A・N ???

・ユイナの彼氏

・βテスター

???

A・N アウラ L v 2 3

・細剣使い

・フェンサーには珍しい一発重視型

・ややSTR寄りのバランス型

・少し遅めのAGIだが、元々の細剣の軽さを応用して十分なスピードで間合いを詰め、高めのSTRで一撃に沈める

・雰囲気から頭が良いように思われがちだがいたって普通の中の上位

・キリトとリアルで知り合い？

・貴婦人的な口調だが、中身は純粹乙女

ミイナのスキル

???

・所有者の武器装備及び接触的行為の禁止

・武器スキル及び戦闘系スキルの取得禁止

(例) ○隠蔽 策敵 裁縫 e t c.

×武器系統 体術 e t c.

- ・ 戦闘後の獲得経験値2倍
 - ・ 条件を満たすと、スキルは発現する
 - ・ また、発現時にコンビを組んでいたプレイヤーにも特別なスキルを与える
- 《コンビ》
- ・ このスキルにおけるコンビはお互いの認証が必要
 - ・ パーティーともギルドとも違う扱いになる

〔考察〕

- ・ アリスを出した理由は、自分の好みもあるが、キリトの相談役兼ヒロイン役で誰が一番ぴったしかと考えた結果がこれ
- ・ オリ主（仮）ではあるものの一応W主人公のつもり（7：3でキリトだけでも）
- ・ 零章の最後に出てきた誓いとやらの5人はキリトとアウラ、キリトの元相棒と未だ出て来てない2人

零章 始動、無剣の戦乙女
EP. 0 邂逅

「ここは・・・どこ？」

私はただ1人、何も無い真っ白な空間に佇んでいた

何故こうなったのかを説明するには今から遡ることほんの小
1時間程前、自分の部屋から始まる

・・・

「それじゃあ、行ってくるよ。」

自分の部屋に存在する簡易的な仏壇に手を合わせ、添えられて
ある1人の少女の写真に挨拶をして私は立ち上がった

「ソードアート・オンラインか・・・」

そう呟きながらナーブギアを手にとる

「約束、守れなかったよ・・・お姉ちゃん。」

堪えきれずに目尻に涙が溜まり始める

これから自分がやろうとしているのは

《ソードアート・オンライン》。1人の男の手によって作り出された産物

世界初のフルダイブ型MMORPGということもあり、前表場も好調。連日ニュースで取り上げられるまでの社会現象を引き起こした

β テストの販売が予告された時、私達3人は β は無理だとしても全員で正規版をプレイしようと誓った

誓い合ったのは私と姉とあと1人、学校も異なる上、面識もないために顔は分からないが、お姉ちゃんのかげがえのない人

彼が正規版を手にしたか否かは不明だけど、一生逢うことは無いだろうし、機会が有ったとしても御免被りたい

彼の詳しい事は追々話すとして、時刻は12時5分前、サービス開始は12時から、少し早い気もするけど遅れるよりマシか

「彼も来るのかな、《ソードアート・オンライン》。」

お姉ちゃんが言うには根っからのゲーマーらしいから、もしかしたらもしかするかな、逢いたくないけど

そんなこんなで部屋のデジタル時計は時を告げる

「リンク・スタート！」

・・・

そんなわけで初期設定を終わらせた私を出迎えたのはこの
真っ白な空間だった

「誰かいませんか！」

「呼んだかね？」

「うわああ!？」

突然背中から声を掛けられ、たじろぎながらもなんとか声の主を見留める

「貴方は誰ですか?」

「私か・・・そうだな、茅場と言えば分かるだろ。」

彼の言葉が真実というならば彼はこの世界のゲームマスター神的存在となる

「それで、その製作者が私に何のご用で?」

「私は君に謝らなければならぬ事が1つある。とりあえず右手をスライドさせてウインドを開いて欲しい。」

指示通りに指を動かすと目の前に1つの画面が現れる

インベントリや装備画面、ステータスなど割りと在り来たりな

表示が立ち並んでいる

ただこの画面には1つだけ違和感を感じる部分が有った

「……スキルスロット？」

画面左端上部、《skill slot》と表示されている部分
に何故か《Error》の文字が表示されていた

「そう、この世界で強くなるための要素の1つがスキルであり、物によつてはボス単独撃破も容易にするほどのスキルも存在するのだが……」

「が？」

「何の手違いかは分からないが、君だけ戦闘系スキルの取得が不可能な設定となつてしまっていたのだ。」

「え？」

余りにも突拍子の無い話に頭の整理が追い付かない

「武器は使えるんでしょ？—補強《スキル》が無くても武器が使えるなら未だ・・・」

「残念だが、武器に関しても装備及び持つ行為すらも禁止されてしまった。」

「・・・」

最大の爆弾投下に私の脳は考えることを放棄してしまい、言葉を失ってしまった

「我々も早急に対応しようとはしたのだが、もはや手遅れの状態です。直すことは不可能だった。」

RPGは読んで字のごとく、多種多様なジョブが存在し、多くの視点からの攻略を楽しめるのがミソの1つだが、プレーヤーが端からそのジョブというわけではない

種類によって初期設定で決まるゲームも有るが、大抵最初は皆勇者から始めるのが定番である

武器はそんなRPGの醍醐味の1つであり、ジョブの基礎を固めるための資金や素材、道具を調達する手段でもある

平たく言ってしまうえば武器無くしてRPGは始まらない

「む、無理ゲーにもほどがあるでしょ・・・」

「せめてものお詫びとして君に1つプレゼントを贈ろう、条件付きで直ぐには使えないが、君の物にすれば必ずや絶対的な力となるだろう。」

「条件？」

「それを言ってしまったら面白味も何もあるまい。なあに、やろうと思えば誰にでも出きる簡単な条件さ。」

「面白いじゃん！他人と同じスタートラインなんて飽きるだけ、
スキル無しイレギュラーが有るからこそ楽しめるってものよ！」

お姉ちゃん達のゲーマー気質が遂に私にも移ってしまったら
しい

「そう言つて貰えるところらとしても有り難い。最後に君のスキルに
ついて教えたいと思う。もう一度ウィンドを開いてくれるか？」

と言われ、もう一度右手を動かしてウィンドを開くと、先程ま
で《Error》が表示されていたスロット部分に幾つかの枠が追加
されていた、更にそれらの中の1番上のスロットに一際異彩を放つて
いる箇所が存在している

「そのスキルが我々からのプレゼントだ。今はスキル名は表記されて
ないが、君の物になったとき、きちんと表記されるから安心してくれ
たまえ。なあに、そのスキルが他人に渡ることは無い。」

「それで、お金とかはどうやって稼げば？」

一番の問題はこれだ、いかに自分が絶対的な力を持つていようが、問題は手に入れるまでの過程に存在する。せつかく使えるようになってでも使いこなせるだけの力を持たない限りは宝の持ち腐れである。

「君がこれからモンスターと戦う道を選ぶのであれば、誰かとコンビを組むことを勧める。コンビであれば経験値は倒さなくても自動で振り分けられ、コルも稼げる。本来ならばダメージ数によって割合は変動するが、そのスキルによってソロで倒した時に得られる数値の倍を両方に分け与える仕様となっている。」

つまり、コンビの相手は戦えないお荷物が着いてくるが、効率は圧倒的に上がる。

互いにメリットが存在するということ

「く、組んでくれる人、いるかな・・・」

距離制限まで存在するともはやたの重荷以外の何物でもなくなってくる

「相手にも特別なスキルを用意してあると伝えれば恐らく一人くらいは見つかると思う。」

だ、大丈夫なのだろうか

「とはいえ、私達にできることはこれまで、これからの君の健闘を祈るとしよう。」

と彼は言い残して、目の前から消えてしまった

た
白い空間は徐々に消えていき、代わりに大きな広場が姿を現し

周りを見渡せば同じような装備を身に付けているプレイヤーが数十人程

見た限り組んでくれそうなプレイヤーはいなそうで、仕方なく広場から出ることにした

「なにやってるんだ？おネーさん。」

キョロキョロとプレイヤーを見ながら歩いていると後ろから声を掛けられる

「おネーさん、ニュービーだロ？困ってるなラ教えてやるヨ、今なら出血大サービス！どんな情報でモタダだヨ！」

声の方に振り向けば、独特なしゃべり方をするフードを被っプレイヤーが立っていた

「えつと・・・貴方は？というかどうして私がニュービーで困っているの？」

「ニヤハハハ！テスターなら皆とつくに武器持ってモンスター狩ってるヨ。ああ、名前ね、おネーさんハアルゴだヨ、βテストで情報屋をやってたんだ。」

「もしかしてアル姐？」

βテスターでもあつたお姉ちゃんから聞いたことがある、性格は少しあれだけど速度と正確性、情報量どれを取っても情報屋随一の女性プレイヤーがいるって

「もしかしてユーちゃんか？」

「ユーちゃん？」

「あれ？人違いか。ところで名前はなんだい？」

「私はミイナ、貴方の事はお姉ちゃんからよく聞かされてます、相当な腕利きの情報屋らしいですね。」

「そっかそっか、成る程あのユーちゃんに妹か・・・」

「あの一、先程から仰られてるユーちゃんとはどなたのですか？」

「ああ、βテストの時に知り合った女性プレイヤーだよ、フルネームはユイナ。」

「彼女は、私のお姉ちゃんです・・・」

「なら話方早い、彼女が何処にいるか分かるか？久々彼女に会ってみたくてサ。」

「ユイナは・・・半年前に交通事故で・・・」

「すまないナ、嫌なこと言わせてしまつテ。そうか・・・ユーちゃん
が・・・」

「そうだ！私コンビを組みたいと考えてるのですが、誰か気前の良い
ソロプレーヤーいませんかね？」

「凶々しい気はする、けどこのチャンスを逃さない手は無い、テ
ストからの情報屋となれば顔は広いはず」

「うーん、いない事はないんだけどネ・・・」

「紹介して貰っていいですか？」

「するのは構わないサ、けどキー坊は極度な人見知りというカコミユ障というカ。」

「組んでくれるのなら何だっていいわ。」

「フィールドにいるとは思うケド。」

と言いつつ彼女の足はフィールドとは違う方向に向かおうと
している

「あれ？フィールドってあっちじゃないの？」

「何いつてんだ？手ぶらでモンスターと闘うつもりカ？」

自分が武器を装備できないことを今さらながらに思い出す

「実は私・・・」

アルゴに一時間ほど前に茅場から言われたことを説明する

「ニヤハハハ！それは災難だったナ！

よし！ここはおネーさんも一肌脱いじやうヨ！キー坊には何がなんでも組んでももらないとナ！」

「キー坊さんはどんな人なのですか？」

「まあまあ、互いに敬語は無しにしようじゃないカ。キー坊もタメで構わないサ、そういうの結構気にする人だからサ。」

「分かった。」

・・・

「わあー、綺麗ー！」

その後アルゴに連れていかれ、フィールドに出た、先までいた広場と異なり、見渡す限りの大草原であり、今まで見たことがない位の絶景がそこには広がっていた

「ニヤハハハ、この景色を目の当たりにしたテスターも皆口を揃えて同じこと言ってたナ。」

「それで？そのキー坊って人の見た目ってどんな感じ？」

「うーん、そうだな・・・どのゲームにも出てきそうな人物とし力なんとモ。」

アルゴは右手をこめかみに当てて深く考える

「あ、そうダ。丁度あんな感じの顔ノ・・・」

彼女は後方2時の方向を向いている、私もつられて目線に移すとそこに何故か項垂れてる男性プレーヤーとその近くに立つプレーヤーが1人

「そうダ！あれダ！おーイ！キー坊！」

大声で彼ら呼び、彼らに近づこうとしたその時、私達を突然光が包んだ

「きゃあっ！何これ！」

「落ち着ケ！ただの強制転移ダ！」

深呼吸をしながらふと彼らを見ると同じ現象が起こっているようだ

リーンゴーン、リーンゴーンリーンゴーン

静寂に包まれた空間の中で、ただただ鐘の音だけが虚しく響き渡る中、私達4人は光の中に包み込まれていた

EP. 1 デスゲーム

キリト side

ローブの男の手によって、《ソードアート・オンライン》はデスゲームへと変貌を遂げた

ゲーム内での死亡は現実世界での死亡とリンクする、それだけでプレイヤーの恐怖を駆り立てるなど容易なことだった

ローブが消えたと同時に周りは様々な負の感情で包まれた

『ふざけるな！こっから出せ！』

『これから人と会う約束があるんだぞ！』

多方向から飛び交う怒声、絶望にうちひしがれ、膝をつくプレイヤー。はつきり言って地獄絵図そのものだった

冷静にプレーするなどはや不可能に近かった

「奴の言葉が本当ならこれからリソースの奪い合いになるだろう、俺はこれから次の街を目指す。クライン！お前も着いてこい！」

これから先、間違いなくフィールドはプレイヤーによつて取り合いになる、先手を打つための最も有効なアドバンテージは情報、特にβテスターは誰よりも有用な情報を持っている、彼らならすぐにも行動に移すだろう

「気持ちはありませんが、えげどよ、すまねえ、俺には一緒にログインした仲間がいるんだ、あいつらを置いていく分けにはいかねえ。」

俺は返答に困った、出来ることなら彼ら全員を連れていきたい所だが、生憎俺に3人以上を守る器量は持ち合わせてない

とはいえ、彼らを置いていくのも気が引ける

「お前には世話になったからよ、俺達は大丈夫だ！お前に教えて貰ったテクで頑張ってみるぜ！伊達にギルドの頭は張ってねえさ。」

「クライン・・・そうだ、もしもの時はツバルを頼れ、あいつならこの状況をなんとかしてくれるだろうからよ。」

彼はβテスト時代からリーダー気質だった、ボス戦となれば指揮を取り、己のセンスとカリスマ性で個性豊かなテストター達をまとめ、駆使してアインクラッド10階層まで登り詰めることが出来た

「だったらよお、お前もくりやあ良いじゃねえか。知り合いなら積む話もあるだろおしよ。」

「悪い、俺には出来ない理由があるんだ。行くならお前らだけで頼む。」

特にこれといった理由というわけではない、ただ嫌な予感がする。それこそ先手を打たなきゃいけないほどの邪悪なナニかが

確証はあるのかと聞かれればそれまでだけど、自分の第六感は警鐘を鳴らすのだ

「そうか！なら深くは聞かねえよ、色々とあんがとな！おめえ！案外可愛い顔してるじゃねえか！」

彼とは一生涯切つても切れないそんな関係が続く、そんな気がした

「おめえもその野武士面の方が100倍似合ってるぜ！」

未だ止まぬ喧騒とクラインに背を向け、俺は次の町に行くため、走り出した

キリト side out

ミイナ side

「ミイナ！ボーツとするナ、さっさと行くゾ！」

突然のデスゲーム宣言、未だ頭の整理が追い付かず、ボケーっ
としていた私に隣から怒鳴られ、現実に引き戻される

「行くつて何処に？」

「そりゃキー坊のどこだよ！早く行かないト追い付けなくなるゾ！」

「ま、待って！せめてもう少し気持ちの整理させて。」

「なに悠長な事言ってるんだ！これからはただのリソースの奪い合いなんだ、ただでさエミイナにはハンデを負ってるんだ、手遅れになるのモ、時間の問題なんだゾ！」

アル姐は決死の形相でこちらに叫んでくる

「分かった、彼の所まで案内をお願い。」

正直言つて恐怖しか無い、けど何もせずここで助けを待つのだけは嫌だった

確かに私にはハンデがある、お荷物にしかならないかもしれない、けどそれを差し引いてもお釣りがくるほどのアドを私は持っている。ならばそれを活用しない手などない

「覚悟を決めたナ。」

私たちは彼を追いかけるため、広場の出口へと駆け出した

ミイナside out

クラインside

「おーいー！お前らー！」

キリトと別れた後、俺は広場で落ち合う予定だったメンバーを探していた

「あ、リーダーー！」

「ここにいたか、おめえらー！」

探し回ること10分ほどであいつらは見つけることができた

「これからどうするんすかリーダーー！」

「なあに任せとけ！俺はさっきまでテスターにレクチャーを受けてたんだ、お前ら全員まとめて鍛えてやるよ！」

「おお！流石リーダー！」

「女癖以外はしっかりしてるう！」

「最後のは余計だ！」

「ハハハハ！」

どんな状況でもバカやって笑える、そんなギルドだからこそ俺は頭張ってられんだ

「ところでよ、おめえら。ツバルつつうプレーヤー知らねえか？」

「知らねえっす、ナンすか？リーダーの知り合いっすか？」

「いやな？さつきまで俺にレクチャーしてくれた人がな、困ったときやそいつに頼れて教えてくれてよ。」

「ほー、ツバルねえ・・・」

「おヤ？おにーさん達、お困りのようだな。」

「うおおお!？」

突然の後ろから声を掛けられたじろいじまう

「そこまで驚かれるとは心外だな。おネーサン泣いちゃうゾ。」

ジェスチャーで泣くふりこそしているけど顔は笑っている

「それで、あんた誰？」

「おネーさんか？アルゴってんだ、よろしくナ。で、おにーさん達ツバ
ルってプレーヤー探してるんだロ？」

「あ、ああ。知ってるのか？」

「そりやーもちろん、伊達に情報屋やってないサ。」

「それで？彼は何処にいるんだ？」

「着いてこいヨ、案内するから。」

彼女に連れてこられ、広場の中央、つい一時間前までローブの男が立っていた所に数人のプレーヤーが集まっている

「久しぶりだな、ツー坊。」

「お、アルゴか！久しぶりだな！」

「えっと・・・アルゴさん？彼は・・・」

仲間の問いにアルゴは愚問だとばかりに呆れた顔で

「ン？だから言ったただ口？こいつがツー坊サ。」

肩に付くか付かないか位に伸ばされた髪、先のキリト程で無いにしろ柔らかめの表情、名前からして男性だと思ってたがこいつあ・・・

「俺はてつきり男性かと思ってたんだが・・・」

「お、俺の名はく、クライン！ 齡24で独身（ぐはああつ！）」

最後まで言い終わる前にツバルに殴られて吹っ飛ばされる

「俺は男だ！」

「ニヤハハハハ!!」

「す、すまねえ！ 悪かった！」

「いいよもう慣れてるし・・・」

な、なんかわりいことしちゃったな・・・いつか飯でも奢ってやっ
か！

「で？ 俺に何か用か？ 出来るだけ手短に頼みたいのだけど。これから
ここにいるニュービーを引き連れなきやいかねえしよ。」

確かにキリトの言う通りの人間だな

「俺はクラインンて言うんだ、俺はさつきまでキリトといたんだが、あいつと別れるときにおめえの名前を呼んでそいつに頼れって言われてよお。」

「何!?キリトがいるのか!?それで!奴は今何処に!?!」

「あつと・・・一時間位前に次の街に行くつってたからそろそろ着いてるところだと思っぜ?」

「なら今すぐ連れ戻そう、あいつが居なかったらこれから先の攻略が難しくなる!」

「そんなにつえーのか?キリトって。」

「ああ、テスト時代じゃテスター最強とまで称された生粋のゲーマーさ、確かコンビ組んでたと思うが・・・」

「おいおい、そんなすげー奴から俺はレクチャーされてたのかよ!俺!」

「コンビの相手が誰かは知らねえけどよ、俺が見た感じソロだったぜ?連れも居なかった様だしな。」

「あつれれー？おつかしーなー、コンビ揃って上の実力持つてるから少しは楽になると思っただけど・・・アルゴ、何か知らね？」

「さあナ。」

「まあいいや、ここに居ない人をどうこう言っただって埒があかねえや。とにかく俺達が今やるべきことはニュービーを引き連れて次の街を目指すだけ！」

「俺達も参加して良いかい？」

後ろから黒髪的美青年が声を掛けてくる

「えっと・・・貴方は？」

「おつと自己紹介が未だだったね。俺の名前はディアベル、βテストターだ。とりあえず近くにいたテストターを集めてきたけど。」

「それは助かるよ！流石に俺一人で大勢を相手するのは無理があるからな。」

「それで？俺達は何をすればいいんだい？」

「進む気のあるニュービーの指導を頼む。」

「了解した。」

「おしつ！聞け！ニュービー共！俺達は先に進む！無理強いはしない、けど共にこの アイソククラッド ぶざけた孤城を壊す覚悟があるのなら！俺達に付いて来い！」

ツバルの声に周りの連中が揃って声を上げる

「行くぞ！」

クライン side out

一時間前

キリトside

「待てヨ、キー坊！」

次の街を目指すためボアをなぎ倒しながら俺は一人草原を駆け抜けていた、5体目のボアをポリゴンにした後、背後から聞きなれた声が聞こえる

「……誰だ？」

振り返って見れば少し小柄な黒髪の少女が二人、左の子に見覚えはないが右の子はどこか見覚えがある

「恩人の名前を忘れるなんて、おネーサン泣いちゃうゾ。」

「お、お前！アルゴか!？」

トレードマークこそないが、独特の口調と言い回し、アルゴに
違いなかった

「今ごろ気付いたか、まあいいサ。」

「ところでアルゴ、お前相棒でも雇ったのか？」

ふとアルゴが連れてる子が気になりアルゴに聞いてみた

「この子の事デ、キー坊に頼みたい事があるんだ。聞いてくれるか？」

「もちろん！俺に出来ることなら何でも聞かせ。」

「オ、何でもするって言ったナ？途中で撤回は無しだからナ？」

「ああ、アルゴには世話になってきたからな、無理難題じゃなければ聞くよ。」

「それじゃア、折角だガ……」

謎の間に少し身構えてしまう、アルゴはたまにとんでもないことを口にする、テストの時も何度振り回されたことか

「キー坊にはこの子とコンピを組んで貰うヨ。」

「……へ？」

違う意味で期待はずれなアルゴの答えに拍子抜けて素頓狂な

声を出してしまう

「なんだ？聞けない理由でもあるのか？」

「べ、別にそういう分けじゃないけど・・・なんというか、拍子抜けというか・・・」

「おやおやく？キー坊はどんな頼み事をこそ望なのかナ？」

「べ、別にそういうわけじゃなくてだな！でもいいのか？俺で。パーティーとか他に手があるだろ。」

「そりや勿論キー坊がボツチだから。」

「悪かったなボツチで。」

「あー、俺つちが悪かった、悪かったカラれだから落ち込まないで聴いてくれヨ。」

「……分かった。」

「とりあえず彼女を見て何か違和感を感じないか？」

アルゴに促され、彼女を眺めてみるも特に変わった所は見つからな……

「あ！武器がない!？」

プログラムで作られたゲームの世界に感情など存在しない、たとえプレイヤーが瀕死だろうと気絶しようがお構い無しに襲いかかるしポップもする

だからフィールドに出るプレイヤーは何かしら武器を装備す

るのだが、目の前の彼女にはそれが見られない、従来のRPGならた
まにいてるがこの世界はデスゲーム、そんな死にたがりの様な真似をす
る輩はいるまい

「ようやく状況が掴めたようだナ。そうサ、彼女は武器を装備してい
ない。否、したくても出来ないんだヨ。」

「はあ!？」

「実はナ……」

アルゴは俺に彼女の身に起こったことを伝えてきた

「こりやまた災難な事で……で、何でコンビなんだ？パーティーの
方が安全だろ？」

「それはキー坊が一番良く知ってる筈だロ、形だけの仲間パーティごっこ程脆

い物はないつて。」

「ああ、そうだったな・・・」

「それにダ、このスキルにはボーナススキルが有ってナ、ウインウィンって分けサ。」

確かにゲームバランスが崩れる所の騒ぎじゃないほどのボーナスだけ・・・

「分かったよ。このまま闘えないプレイヤーを置いてくのも気が引けるしな。」

「色々とすまないナ、俺っちも出来るだけの事はサポートするヨ。」

「そういえば未だ名前を聞いてなかったな、俺はキリト、よろしく。」

「私はミイナ、これからたくさん迷惑かけると思うけどよろしく。」

「そういえばアルゴ、お前に頼みたい事があるんだけど。」

「なんだ？」

「お前の攻略本に載せる情報収集とマップは俺がやっつくからお前は一度始まりの街に戻ってくれるか？」

“なにが”とは言わなかった、アルゴなら察してくれると思う
たから

「分かった、ニュービーを頼むって言いたいんだロ？出来るだけ早くそちらに向かうサ。」

「サンキュ、この礼はいつか精神的に。」

アルゴは俺達に背を向けて来た道を引き返していく

「さてと、ミイナだっけ？」

「は、はい！何ですか？キリトさん。」

まだ緊張が抜けきれてないらしい

「そこまで気張らなくていいよ。それとゲームなんだ、タメ口でいいよ。」

「はい。」

「とりあえずさ、ここで話すのもあれだし、宿行こっか。」

キリト side out

ミイナ side

アルゴからの薦めでキリトとコンビを組むことが出来た、その後彼に促されるまま、1つの宿にたどり着き、部屋を取った後、彼に呼ばれて部屋に入った

「とりあえずこれからの方針を決めよつか。君はこれからどうしたい？」

「……」

広場を出る前にある程度決めていたはずなんだけど、いざ聞かれてみると中々答えられないものなんだなあ

「本当なら職人を薦めたいのだけど、武器が使えないとなると鍛冶師は勿論だが商人も難しい、となると宿で一人待っててもらうのが一番安全か。」

「それだけはやめて……」

「凶々しいのは分かってる、けど『ただいま』が確約されていないこの世界で今日死ぬかと知れない人の帰りを待つことだけは嫌だ、もう2度とお姉ちゃんの時々の舞だけは踏みたくないから」

「分かってる。私なんかが出しやばっちゃいけないって、鬨えない私を連れてったってお荷物以外の何者にも成らないのも承知、けど何も出来ずにただ私の知らない場所でキリトが殺されるのは嫌なの！どんなに使えなくなったらって身代わり1つには事足りるから！だから！だから！」

もう止められることなど出来なかった、どんなに心で止めて！と叫んでもストツパーがかかることはなかった

「もう止めてくれ！」

「っ!？」

「何でそんなに自分の命を軽んじることが出来るんだよ……そりや俺だって君が知らない場所で死ぬのは怖いさ、けど俺の代わりに死ぬなんてバカな事だけは止めてくれないか。それが約束してくれるなら君の要求を呑むよ、無論君の事は最優先で全力を持って守り抜く。これでもいいか?！」

「本当にいいの？私を連れてっても。」

「だからそう言っただろ？」

キリトから軽くデコピンを食らわされる

「それじゃ最後に確認するぞ?」

「うん。」

「君はこれから先多くのモンスターを武器無しで対面しなきゃいけない、勿論俺が倒せるものは早めに倒すし、極力対峙するのは避けていくつもりだ、けどそれだって絶対じゃない。そんな時君は怖じ気づかずにしつかり向き合えるか?」この世界で生き続けるために一番大切なのは「心の強さ」だ、一度負けちまったら勝てるものも勝てなくなるぞ。一度でも弱味を見せたら相手は容赦なく襲ってくるぞ、お前には一緒に来る覚悟があるか?」

「勿論!それに全力で守ってくれるんでしょ? 私ナイトの騎士様。」

「仰せのままに。」

「これからたくさん迷惑をかけると思うけど、よろしくお願いします!」

「さてと、本当なら「森の秘薬」クエストを受ける予定だったんだけど、変更だな。」

「森の秘薬クエスト？」

「ああ、片手用直剣が手に入るクエストでな？その剣が強化すれば三層まで使えるから人気なんだ、だから早めに受けたかったんだけど予定変更だな……」

「い、いいよ！別に気を使わなくて！それで死なれても後味悪いし……」

「テスターがやっても下手すれば死ぬ程の難易度だから流石にこの状態でいくのも無謀だし、平均一週間はざらじゃ無いほどのクエストだけど大丈夫か？」

「う……」

「なあに心配すんな！クエストは無くなったり逃げたりしねえよ、まずは基盤を固めてから挑戦しようぜ。そこで、だ。ミイナは隠蔽スキルって取れるか？」

ウインドを開き、スロットの画面を選択すると隠蔽スキルと探索スキルの両方がスロットに追加される

「うん、取れたよ。」

「まず、この一週間で隠蔽スキルを全力であげて貰う。それが生きるための手段の1つだ。ほとんどのモンスターは隠蔽スキルを発動していればまず気づかれることはない。例外はあるけど迷宮区のモンスターはそれでどうにかなる。まずはそれでモンスターに慣れちゃおう。上げ方は簡単、四六時中発動してれば時間に比例して上がっていくんだ。」

「分かった。」

「それじゃ、これから頑張ってください！」

EP. 2 第一層ボス攻略会議

キリトside

デスゲーム開始から1ヶ月が過ぎた、アルゴと別れ、ミイナと共に攻略することを決めた後、俺達は隠蔽と策敵スキルの熟練度上げと並行してフィールドでレベルあげに専念していた

一週間後、スキルは互いに500まで上がり、レベルも互いに15まで上げることができた

その後俺達は迷宮区に潜ることにした、ミイナがいる分危険はあるが、いつまでもウダウダいつてる暇は無い

潜り始めて一週間、レベルも30まで上がり、熟練どはそれぞれ800ずつ、他のプレイヤーは勿論、コボルド辺りはミイナが見つかることもなくなった

そして遂に俺達はボス部屋を発見した

別にマップで商売する気もないからボス部屋まで埋まったマップをアルゴに渡し、後はツバル達に託した

「キーリートー！」

俺が回想に浸りながらボーツとしていた所、隣から肩をゆさぶりながら俺の名を呼ぶ声によって現実に引き戻される

「悪い、少し考え事してた。」

「まったく…どうせ上の空で覚えてなさそうだからもう一度聞くよ。」

「すまん。」

「それで、本当に攻略会議に参加しないでいいの？」

「別に強制じゃないから構わないだろ。」

「もう！そういう問題じゃ無いでしょ！

私達は恐らく現時点

で最高のレベルに達している。なのに何で参加しようとしなの？」

その理由のほとんどは君にあるんだけど・・・

「レベルなんて所詮単なる数字の配列に過ぎないよ、本当の強さはもっと別の所にある。それに俺は強くなんかないよ・・・」

確かにテストの時もトップ張れるほどの強さだったと思う、けどそれはあくまで

“コンビとしてのキリト”の強さであって“個人的な”強さでは無い、相棒がいたから俺は上り詰めることが出来たんだ

「大体あの日、ニュービーを見捨てた俺を俺をあいつらが許すとも思えないしな。それに、お前をボス攻略に連れて行けるわけないだろ、流石に俺だってそこまで器用じゃない。」

「それって私が邪魔だって言いたいわけ？」

「どうしてそう何でも悪い方に捉えたがるんだよ！そんなわけないだろ、お前といると楽しいし！ミィナみたいな可愛い子、守れるだけでも冥利に尽きるもんさー！」

「か、可愛い」

突然目の前の彼女の顔が林檎みたいに真っ赤に染まる

「お、おい顔真っ赤だぜ、体調大丈夫か？」

ここはゲームの中であり、プログラムの産物であるこの体が病気になるったりすることはないが、現実世界での俺達の体は別問題、長時間に及ぶこの世界での運動は現実世界の脳あつちに大きく影響する

前に一度ミイナが陥り、一日潰れたことはまだ記憶に新しい

「そ、そんなわけないでしょ！ほ、ほら！参加はしなくても見物はするんでしょ！行こ！」

彼女に促されるがまま、宿を跡にした

ミイナside

「まだ顔が熱いよ・・・」

“可愛い”

完全に女子とか恋愛に疎くて、一番そういう事から離れてそうなきリトから突然告げられた事に対して驚きともう1つ、何かよく分からない心の底から湧き出る暖かい感情に包まれた

その感情が何かを考えるより先に羞恥心を優先してしまい、恥ずかしさと体の火照りで顔を真っ赤にしながら叫んでいた

「少ないな・・・」

ふと、隣にフードを被って広場を見つめていたキリトから言葉が漏れた

「下手したら全滅しかねない世界でのボス戦でしょ？十分じゃない？」

広場に集まったのはパツと見45人前後、ツバルさん達のおかげで死者は3桁止まりで済んだけど流石にボス戦に参加する勇氣はないらしい

「皆、知らないところで攻略が進むのが怖いんだ、そういう生き物ななさ、俺達ゲーマーってのはな。」

「ふーん……」

私達は今フードを被り、広場が見えてかつ、少し離れた場所に建つ建物の壁に寄りかかって広場の様子を眺めていた

「ところでさ、キリト。」

「どうした？」

「アルゴから聞いたんだけどさ、キリトのコンビの相手ってどんな人だったの？」

「うーん……なんて言えばいいかな……表立って魅せるタイプじゃない、裏で駒を動かすタイプだろうな。」

「智将型ってこと？」

「勿論戦闘も逸品ものだったさ、けどあいつは指揮をとるときが一番輝いてた。」

そんな事を話していれば広場は一層騒がしくなり、中央に一人の青髪の青年が現れる

「少し遅くなったけど始めようと思います！
全体的にもう少し前に来てくれるかな？」

恐らく彼が今回のリーダーなのだろう

「既に知ってると思うけど俺の名はディアベル！職業は気持的に《ナイト》やっています！」

「ジョブシステムなんて存在しないだろ！」

「本当は《戦士》って言いたいんだろ！」

彼のジョークに広場全体の空気が和やかになる

「凄い・・・」

思わず感嘆の声が漏れてしまう

「ああ、理想的なリーダーの形だ。」

「まずは俺達をここまで導いてくれたツバルさんに感謝を述べたい！
ありがとう！」

「何とかやれたみたいだな、あいつ。」

「うん。」

「2週間前、誰かは分からないけど誰かがボス部屋を発見してくれて更にマップを提供してくれたおかげで先日、俺達のパーティーはボス部屋を見つけることができた！」

「見つけたのは私達なのに・・・」

「言うてやるな、あそこで名前を出してしまえば俺達は今頃あの中にいるはめになる。そうだったら困るだろ？」

「そうだけどさ・・・」

自分が選んだ道だとは分かってはいるけどキリトの頑張りを傍目で見してきたからこそ報われないのは難儀なのである

「ここまで1ヶ月！色々あったけど俺達は《始まりの街》のプレイヤーに勝って示さなきゃいけない！このゲームはクリアできるんだということを！そうだろ！皆！」

「うおおおおお!!」

「それじゃあ、まずはパーティーを組んでくれ！」

《big》「少し待ってくれないか!」《big》

ディアベルが広場にいるプレイヤーに指示した後、一人のプレイヤーが階段を降りて中央の壇上に上がる

「意見は大歓迎さ、けど喋るなら最初に名乗ってくれるかな？」

「俺はヒデ、ここにいるプレイヤーの中に『キリト』がいるはずだ！」

「何で俺？」

「キリトさんがどうしたんだい？」

「俺達のパーティーの1人、シズルって子がいるんだが、彼女がキリトにMPKされかけた！コルを払えとまでは言わないが、俺達はそいつに命を預けたくないし預かる気もない！」

「んな無茶苦茶な……」

MPK、まさかこんなに早い段階からその言葉を聞かされるとは思ってたかった

PKが当たり前のゲームじゃ別に珍しくもないのだが、ここはデスゲーム、この世界でPKする外道はいないと思ってたが上にその言葉が出てきたことに驚きを隠せない、さらにその犯人が隣の彼と来たもんだ、笑えないにも程がある

「お、おお俺はやってないからな！」

「分かってるわよ、何日一緒に居たと思ってるのよ。」

そう、彼は一度もMPKは勿論、MPKまがいの事などしてないし、する度胸ももちあわせてないだろう

「あんにやろ、とつちめてやる！」

相棒をあそこまで侮辱したんだ、それ相応のお返しを食らわさないと私の腹の虫が納まらない

「待て待て待て、何をやる気だ！」

「決まってるでしょ！とつちめてやるの！相棒を侮辱されて落ち着いていられるか！」

「やめろお！気持ちは嬉しいが、お前は出るな！お前まで侮辱されるのは俺が耐えられない。だから頼む、鎮めてくれ！」

「分かったよ・・・」

広場の方は誰も喋らない、少し重くなった空気だけが張り詰めている

「発言いいか？」

静寂の中、ガタイの良いバリトンボイスの外国人らしき男性が前に進み出る

「俺はエギル、あんたに言いたいことがあるんだが良いか？」

「何だよ。」

「別に俺はそのキリトって奴は知らねえし、どんな奴かも分からねえからお前の言葉の真偽を疑うつもりは毛頭ない。だがな、TPO位は弁えてほしい。これから一致団結しなきゃいけないときに疑心暗鬼に陥れるバカがあるか。」

「くっ。」

「それと、お前も持ってるだろこれ。」

エギルが取り出したのは表紙にネズミのマークが付いた一冊の本、私達が情報を集めてネズミがまとめた攻略本

「貰ったよ、けどそれがどうしたんだ。」

「こいつの情報提供者がお前の言うキリトって奴だ。」

「本当かい？エギルさん。」

「これを作ったアルゴ本人に聞いたんだ、間違いない。」

会場の空気が少しざわつき始める

「今回はこの変にしとく、けどボス戦が終わったら覚えとけよ！キリト！」

ヒデが席に戻ったのを皮切りにエギルも自分の席に戻る

「それじゃあ気を取り直してまずは仲間や近くにいる人と6人パーティーを組んでみてくれ！」

「後で礼を言わなきゃな・・・」

「そうだね、確かエギルさん、だっけ？」

「けどなー、どこで泊まってるかも分からないし。」

「アルゴに頼む？」

「それは最終手段だな、手数料とられそう。」

「ですね。」

「お、組み終わったみたいだな。」

広場に目を戻せばバラバラだったプレイヤーもある程度固まっている

「今朝、ガイドブックの最新刊が置かれていた！」

ディアベルが一冊の本を取りだし、己の前に掲げ周りに見えるように出す

「ボスの名前は《イルファング・ザ・コボルドロード》、そして取り巻きに《ルインコボルド・センチネル》が沸くらしい。武器は斧とバツクラでラスゲに入るとタルワールに持ち変えるそうだ。取り巻きの数はボスのHPが減るごとにリポップして計12体出現するそうだ。」

「1ついいかな？」

確かツバルと呼ばれていた少年の隣に座っていた少女が挙手する

「私はアウラ。そのガイドブック、何か違和感ありませんか？」

「そう言われてみれば確かにそうだね・・・」

「おい！表紙見てみるよ！いつものネズミ印が無いぞ！」

そう、あのガイドブックにネズミ印は載っていない。とはいえ、作ったのはアル姐、それは不変の事実。なら何故消えているのか。結

論から言えば主犯は私である

三日前、アル姐に頼み込んで今回のガイドブックだけマークを消してもらったんだ、今回のガイドブックはアル姐著ではなく他の誰か、現状アル姐と同等かそれ以上の情報通の者、キリトということ伝える、それがこの目的

め
全ては自分の恩人であるキリトの風当たりを少しでも良くするため

彼らがどう思うかは運次第、最悪でも現状維持ならまだ良し、悪い方に転ばなければおけ

「ただのつけ忘れだろ。」

私は黙って項垂れた

「今日はこれで終わりにしようと思う！ただ、さっき伝えた情報は全てβテストの時のものであること、変更されている可能性が十分あるということに留意してもらいたい！じゃあ解散！」

「ほら、行くぞミイナ。早く立ち去らないと気付かれる。」

「りょーかい。」

返事をし、彼に続いてその場を立ち去ろうとした、その時

「だれだ！」

突然前にいたキリトが振り返り、声を押し殺しつつも怒気を孕んだ
声で喋る

「バレてしまいましたか・・・」

先まで誰も居なかった筈の自分の右側に人が突然現れ、フードを被ったプレーヤーはゆつくりと声を吐き出した

EP. 3 意味とは何か

My n a s i d e

1回目の攻略会議も終了した日の夜、私達は昼頃の会議のメンバーが宴をしているらしい《ホルンカ》の街を隠蔽スキルで身を隠しながらブラブラ歩いていた

「キリト、ちよつと待ってて!」

「あんま遠く行くなよ、探すの大変だから。」

「大丈夫、すぐそこだから!」

キリトから離れて路地を右に曲がれば奥には黒パンを黙々とがぶりつくフードを被ったプレーヤー、その人を私は知っている

「アースーナっ!」

彼女に近づいていき正面から声をかけた
——隠蔽スキルを解除してないことを忘れ——

「ふえ?・・・きやあああ!!!?!」

「え?ああ!!ごめん!私!アスナ!ミイナだよ!」

腑抜けた声を出した直後の悲鳴により自分がスキルを解除してないことに気付き慌てて解除した後、フードを脱ぎ、細剣を突きつける彼女に弁明する

「まったく、暗闇の中から突然声かけないでよ!びっくりするじゃない」

い！」

「ごめんごめん、あまりにもさつきまでのアスナが面白くってさー。」

さつきまでのアスナとは勿論黒パンにがぶりつく彼女のこと

「仕方ないでしょ、あのパン味はしないし、かといってお腹は減るし・・・」

「ハハ、確かに。けどさ、料理なんて一手間加えれば上手さは跳ね上がる物、この世界だって 同じ。これ使ってみて。」

彼女の隣に腰掛け、彼女に1つの小瓶を渡す

彼女はそれを受け取り、さつきまで食べてた黒パンに使い、一口付ける

「美味しい・・・」

よっぽどお気に召したのか、手中にあった黒パンはものの数秒で焼失する

「御馳走様。クリーム、美味しかったわ。」

「お粗末様です。」

「このクリーム何処で手に要れたの？」

「1つ前の村で受けられる《逆襲の雌牛》って言うクエストの報酬だよ。受けてみる？生憎共闘は無理だけどコツ位なら教えられるし。それが嫌なら幾つかおすそ分けするよ？」

「いい、私は美味しいものを食べるためにこの街まで来た訳じゃないから。」

「……」

返す言葉も無かった

「私は、私でいるために戦い続けてきた。そんな私を変えたのはあのキリトってプレーヤーと貴方だったわ。」

彼女と私たちの出会いはアルゴからの依頼で噂のクエストを受ける途中、オーバーキルを繰り返す彼女を助けたことから始まった

最初こそ注意喚起で済ませたものの、その後彼女が疲労で倒れ、放つとく訳にもいかず、彼女が起きるのを待ち、最終的に私は仲良くなり、キリトとはまあまあな関係を持っていた

「あの時、貴方達に会ってなかったらあのままのたれ死ぬ所だったわ……」

「それは言ってる。」

「ただ、これだけ聞かせて。」

彼女の顔が突然真剣な顔つきになる

「貴方達はいったい何がしたいの!?!人に会議に出ることを薦めておいて自分達は出ないし!聞けば貴方の相方はテストーの中でもトップクラスらしいじゃない!」

「私達は貴方に選択肢を与えただけ、貴方に敷かれたレールの上を走って欲しくないだけ、彼みたいな分岐点の無い一本道にしないため。攻略会議に参加しなかったのも彼の道にそれがなかっただけ。」

「どういうことよ！今彼に攻略会議以上に意味のあることなの!？」

「彼が目指すべき終着点に意味があるのかは誰も知らないよ。けど彼は常に誰かのためだけに動いてる。」

「けど、それに貴方が従う義理は！」

「あるよ！十分すぎるくらいあるよ。私は彼に助けられている。彼がいなかったら私はこの世界に抗う事を知らずに私は無駄死にしていた。なら例え行き着く先が真つ暗な闇だとしても彼に着いていくと決めたから。」

「強いよね。」

「ううん、私は弱いよ。けど彼が側にいてくれるから私はこの世界で生きていける。彼を守るなら私は身代わりにでも何でもなってる。」

「ふふ、面白いこと言うのね。分かったわ、貴方の思う通りに生きなさい、もし帰れることができたならご飯てわもおごるわ。」

「それは嬉しいです！それじゃあ御武運を祈ってます！」

彼女に背を向けながらフードを被り、隠蔽スキルを再び発動し路地裏から抜け出した

アスナ side

「敷かれたレールの上・・・ね。」

高校受験は通過点、良い大学に入って一流企業に入社するのが当たり前だと母親に言いつけられ育った私にミイナの言葉は新鮮だった

「どうした？そんな所で。」

余韻に浸っていると頭上から声がしたので顔を上げるとそこにはツバル君の姿が

「ううん、何でもない。行きましよ、教えてくださるのよね？」

「このままだと危険だからな」

RPGの専門用語について聞くのは建前、本音はツバル君の部屋にあるお風呂なんだけどね

キリトside

「何だよアルゴ、こんな時間に呼び出して。」

攻略組の宴も終わりを告げ、各々が帰路に着き、俺たちも帰路に着こうとした時、アルゴから召集のメッセージが届く

「仕方ないだろ、ツバ坊がキー坊を呼んだんだから。」

「おい、ツバルには俺に関する情報を渡すなって多額の口止め料と共に言ったよなあ!？」

俺達がやろうとしていることに関して誰からも詮索されたくない

し、邪魔もされたくないためアルゴには所持金の殆どを口止め料として払った筈なのだが

「いやア、そのオ、何と言えば良いカ・・・」

「口止め料5万コル、しつかり耳を揃えて払って貰うぜ。」

アルゴの額に冷や汗が流れる

「すみませんでしタアアアア！」

・・・

「・・・まったく余計なことしやがって。」

「売っちまったものハ仕方ないサ、きつぱり忘れてツ―坊に会おうヨ！」

「お前が言うな！」

ハラスメントコードが発生しないレベルのギリギリの力でアルゴをどつく

「お前がツバルと何を約束したかは知らないけど、俺達は必要最低限会わねえよ、言ったよな俺達の行動を邪魔されたくないって。」

「そいつは無理だな、もう話は着いてしまつタ。」

「・・・二層の『トレンブル・ショートケーキ』2つで手を打ってやる。」

5万コルを釈迦にされたんだ、これくらいは安いもの

「ぐぬヌ、背に腹は変えられないからナ。」

「忘れるなよ、約束。それとミイナ、隠蔽スキル発動しとけよ。」

ツバル side

「ふわああああ。」

アスナを自分が泊まっている宿に呼び、目的を果たした後、アスナが風呂に入りたいと頼まれ、彼女に風呂を貸した後、何か聞いちやいけない声を耳にした

「確かある程度の音は防いだはずだよな？」

まあ声が出てしまうのは分からんでもないけどな、俺もその1人だし……

コン、コココン

不規則なノック音が聞こえる、こんなノックをするのはあいつしかない

「開いてるぞ。」

「失礼するヨ。」

予想通り、扉の前にはアルゴとキリトが立っていた

「お前に話すことは何もない、要点だけ答えて俺は帰るからな。」

「答えてくれるならそれでいいさ。」

「で、何の用だよ。」

「まあなんだ、とりあえず座れよ。」

部屋に備え付けられた椅子に二人を座らせる

「出来れば簡潔にまとめてほしい。こちとて長話に付き合えるほど暇じゃないんでな。」

「キリトに聞きたいことは2つあるんだが、まずお前は何がしたいんだ？ トップを張る実力と経験を持ち合わせておいて何故攻略会議に来ない。」

「先手を打ちたかっただけさ。」

「どういうことよー！」

「ニヤハハ、それがわからないんじゃないやまだまだ半人前だナ。」

キリトに曖昧な答えを返され、更にはアルゴには笑われ、ムカツとする

「お前はアインクラッドこの世界の未来をどう見る？」

「未来？ そりゃ犠牲者を出しながらも順調に進んでくんじゃねえのか？」

「流石にまだ理解するには早すぎたナ。」

「で？二つ目は何だよ。」

「アウラって女性プレイヤー知ってるか？」

「俺たちは知ってるゾ、何しろ1ヶ月間全プレイヤーの中で一番彼女と会ったからナ。」

「さあな、俺は知らないな。」

「その彼女がお前に会いたがってたんだ、空いた時間にでもアルゴを通して会ってみてくれないかな？」

「別に断る理由もないし良いかな。頼めるか、アルゴ？」

「お姉ーサンに任せなさい！」

「聞きたいことはそれだけ、それじゃ互いに生きてたらまた会おうや。」

「ああ、誰も死なずにボスが倒されるのを祈つといてやるよ、またな。」

キリトは席を立ち、俺に背を向けて部屋から出ていった

「あれ、アルゴは帰らないの？」

「ツー坊、キー坊の事よろしく頼むね、あいつ本当に無理するから、1人で突っ走って誰にも頼らずに勝手に抱え込んで自爆する人、馬鹿でコミュ障だけど、どうしようもないお人好しなあいつだからあいつの周りに人は絶えないの、そんな彼でもいいからしっかり向き合ってあげてね。」

突然口調が変わったアルゴに驚きを隠せない

「アルゴ、お前まさか……」

「湿気た話は終わりだよ！ そうだ、ツ一坊、お風呂貸してくれヨ。」

「ああ構わねえさ。そこの奥の扉だよ。」

アルゴが風呂場に向かっていく

「(あれ？何か忘れてるような……)」

ガチャツ

「キャアアアア!!」

「(あ、アスナの事完全に忘れてた)」

バツシーン

キリトside

「お疲れさま、キリト。」

「悪いな、こんな寒い中待たせちゃって。」

ツバルとの会談も終わり、扉を開けるとそこには相棒がいる

「全然、キリトから貰ったコートがあるし！」

今はまだ秋といえど時刻は12時を回っている、いくら冬じゃない

とはいえ暖房も何も無い所で立ってたら寒いに決まってる

「(嘘つけ、手震えてんじゃねえか)」

仕方なく無言で相棒の右手を掴み自分の左手と絡み合わせる

いつだったか友達に教わった効率の良い相手の温め方だけど・・・

初挑戦だから効き目があるかわからん

これ手しか温まらねえよな？大丈夫だよな？温まってるよな？流石に自分のせいで相棒に風邪をひかれても後味悪いしな、ゲームの中だけど・・・

「ちよちよちよ！な、何するんですか!？」

「え、あつごめん！寒そうだったから・・・嫌だった？」

「べ、別に嫌とかそういう訳じゃ・・・無い・・・けど・・・ありがとう」

顔を真っ赤にして俯く彼女

俯いた理由は分からないけど、嫌そうじゃなくて良かった

「ほら、さっさと帰って寝るぞー！」

「あ、ちよつと待ってよー！」

彼女の手を握ったまま俺達は宿に向けて走り出した

ツバル side

端から見てもとてつもない威圧感を放つ鉄の巨大な塊の前に俺達プレーヤーは集まっている

「皆、今日は集まってくれてありがとう！1人も抜けずに参加してくれたことは」

そんな集団の先頭にいる青髪の青年ディアベルが言い放つ

「俺から言うことは1つ！勝とうぜ！」

「うおおおおお!!」

各々の武器を振り上げ、開け放たれし地獄の門へと走り出すプレーヤー

その先に待つのは勝利か全滅か、例え明日の朝日が見えずとも俺達がこの足を止めることは無いだろう

さあ踏み出そう、例えどんな小さな一歩でも、いつか意味のある大きな一歩に繋がると信じ

「お前ら！死んでくれるなよ！」

「そつちこそ！」

アインクラッド攻略
囚人達の逆襲はこれから始まる！

EP. 4 姿無き殲滅者

ツバルside

「攻撃開始ー!」

ディアベルの掛け声によってボス攻略は幕を開いた

バカでかい明るい色で彩られた部屋の両隅から順々に灯が点つていき、奥で佇む塊を照らす

「ぐおおおお!!」

右手にタルワール、左手に野太刀を手にし、空を仰ぎ咆哮を轟かせ、それが合図とばかりに俺達攻略組は陣形を整え、ボス戦は始まりを告げた

「取り巻きの数は三体!打ち合わせ通りに頼むぞ!」

俺達は人数の関係上取り巻きの相手をしているが戦況によってボスを叩く

「スイッチ!」

「はああああ!」

後ろで構えていたアスナとスイッチで後退し、ふと自分のパートナーメンバーを見渡してみる

ローブを被った女性プレーヤーであろうアウラとアスナ、二人は互いに細剣フェンサー使いだが、スピード重視のアスナに比べ一発を確実に急所に

決める技術重視のアウラ、同じ細剣使いといえど戦い方はまるで違うのだ

「てやあああつー！」

攻略会議で一悶着あったシズルも含めた四人が俺達のパーティー

「A隊は下がって回復を！B隊は交代して防御を頼む！」

ある程度取り巻きを殲滅した後、ふとボスと戦ってる本隊を削っているディアベルの方を向けばA隊と入れ替わりにタンク部隊であるB隊がボスを囲み、盾を構える

「順調そうだな。」

誰に問うでもなく一人呟く

「そうね、恐ろしい位に。」

後方で戦っていたアウラが自分の右となり立ち、俺の独り言に返してくる

「何か恐ろしい事が起きそうな言い回しだな。」

「嫌な予感がするのよ、それにいくらか情報があってもあくまであれはテスト時のもの、正規版に、変更点は常識イレギュラーでしてよ？」

「何が恐ろしい事が起こるとでも言うのか？」

「生憎内容までは分かりませんが、気を引き締めて行かないと、足元掬われますよ。」

「そうだな。」

「G隊はF隊と共に残りゲージを1本削ってくれ！」

「今気にしても仕方ないさ、今はとにかくあいつを倒すことに集中しよう！」

「ええそうね。」

キリトside

「キーリートー！ボス戦見学に行こうよ！」

今日の探索も終えて宿で疲れを取っていると突然ミイナが顔を出してきてこんなことを言い出してきた

「エツトミイナサン、モウイチドオネガイシマス。」

「だーかーらー、ボス戦見学に行こうよ！って言ったのだ！」

人の変化とは実に末恐ろしいものだと思つた、つい一ヶ月前なドモンスターと顔を会わせることすら困難だった相棒がこんなことを言い出してきたことなど誰が予想していようか

「でもまたどういふ風の吹き回しだよ。」

「嫌な予感がする、ただそれだけ。」

「仕方ないな。ただひとつ、眼鏡とフードを着ていけ、俺達の隠蔽スキルはおそらく一番だとは思うが万が一ということもある。それに余

りお前の顔を知られたくないしな」

自分で言っただが、恥ずかしくなってしまい、尻窄みになってしまっ
た

「本当に!? ありがとうキリト!」

「・・・ほっ」

最後の部分を聞かれなかった事の安堵と少しの不満が入り交じった溜め息を吐く

「(最後の言葉の意味、何だろう?)」

ツバルside

「気い付けろ! ボスが武器を持ち換えてくるぞ!」

ボス戦も終盤に近づき、ゲージも残り1本に差し掛かる

βテストと同じなら、ここでタルワールと持ち換えるが・・・

「ここは俺が出る!」

突然ディアベルが飛び出し、ボスへと向かっていく

「(おいおい、何やってるんだあいつは!)」

ボスは武器を放り投げ、腰に据えてある野太刀を取り出したはずだ
った

「やめなさいディアベル！ボスが持つてるのはタルワールじゃなくて野太刀よ！」

隣のアウラの怒号に気づかされ、ボスを見ればボスが持つてるのはタルワールじゃなくて野太刀

「戻れディアベル！全力で後ろに飛べええ！」

俺も遅れて叫ぶがもう遅い、ディアベルの剣は青い光を纏ってしまっていて、モーションに入ってしまった、全員が虚を突かれ間に合わない

ボスは待つてましたと言わんばかりにソードスキルを放つ体勢を取る

誰もがディアベルの死を覚悟したその刹那

「届けー！！！」

突然後ろの入り口から叫び声が聞こえ、一筋の閃光が射し、ディアベルの剣を弾き飛ばした

ソードスキルを強制キャンセルされたディアベルはデイレイを喰らい、その場に立ち止まる

ボスによる「施車」による凶刃が彼に迫るが間一髪、ディアベルの眼前を掠めるだけだった

「何やってるの！早くディアベルさんを回収しなさい！」

俺達より少し後ろに居たアスナが怯んで立ち竦むレイドメンバー

に呼び掛ける

ボスは既に次のモーションに移っている、1発目は不発に終わりこそしたものの、
「施車は」連係技、直ぐにでも2発目は放たれる

「はああああー！」

もう一度後方で声がしたと思えば、一人のローブを被ったプレイヤーがアスナに劣らぬ程の素早さでディアベルの下へ駆け寄り、ディレイで動けぬ彼をキバオウ達のいる方へ投げ飛ばす

「自分！ディアベルはんに何て事すんねん！」

「そいつが死ぬよりよっぽどマシでしょ、動けなかった引け腰共が！」

ディアベルは助かったが、ボスの攻撃は緩まない、次なる標的をフードのプレイヤーに変えてもう一度「施車」のモーションに入る

「武器もなしに単身乗り込むんじゃねえよ。」

横からの薙ぎ払いで迫ってくる凶刃を避けようとしてもしないプレイヤー

そしてそいつに当たる寸前、三度声が聞こえ、2回目の閃光が迸る

ガキイイイインツ

金属同士がぶつかり合う音がしたと思えば最初に飛び出したプレイヤーに向けられた凶刃を受け流すもう一人のプレイヤー

「そういえば最初に飛び出したプレイヤー、少し変じゃない？」

「ん？そう言われて見れば確かに……」

はつきりとはしないが確かに違和感が存在する

「あの子、武器を所持してないわね。」

「あー！」

よく見てみると両の手のどちらにも圏外に出る際必要不可欠な物、武器が存在しないのだ

「まさかあの子丸腰でディアベルを助けよう？」

「どんな鉄の心臓の持ち主だよ……」

武器無しということはここに向かうまでに折れてしまったのか

それでもボスに丸腰で挑む理由にはならんし、ストックくらい持ち合わせてるだろう

後考えうるのはディアベルを救ったあの閃光、恐らくあれはダガーによるものだろう

それをやったのが彼女だという説もあるが1つ目と同じ理由だし、そもそもダガーを主武器にする物好きなど聞いたことない

「ぐずぐずするな！戦いはまだ終わってねえぞ！各自回復に徹して準備が終わった奴は陣形を整えラストゲージを削りにかかれ！」

2回目に飛び出したプレイヤーが1回目のプレイヤーを抱え、入り口へと戻るついでに突然の事態で困惑し、陣形もくそもない他のプレイヤーに指示する

最初は皆固まっていたが、各々ポーションを取り出すなり陣形を整えるなりしていた

投げ飛ばされたディアベルは投げ飛ばされた衝撃と死に対する恐怖心により気絶していたが死んではいなかった

キリトside

「ここがボス部屋？」

渋々ミイナの要望を呑み、ボス戦見学の為に迷宮区を進み、30分弱掛けてようやくボス部屋前に辿り着いた

「おや、貴方達も来ていらしたのですね。」

「アリス……」

金髪に碧眼、どこかのファンタジーの妖精にでもできそうな風貌であり、やけに畏まった言い回しであり、魔王でさえも対峙すれば怯ませそうな威圧感を持ちながらどこか母性を感じられる

それが彼女に対する俺の第一印象だった

「攻略会議以来ですね。」

「ああ、今回は隠蔽してないのな。」

「あ、アリ姐？」

突然アリスの動きがフリーズした

「おーい。」

彼女の目の前で片腕をブンブン振ってみるも反応ナシ

「仕方ない、この剣で斜めから叩けば・・・」

「殺す気ですか!?! 貴方今私を壊れたテレビと同等の扱いをしようと思いましたよね! 貴方には敬いの気持ちがないのですか!?!」

「いや、すまん。あまりにも長くフリーズしてたもんでつい・・・」

「やはり貴方はバカな様です。しかし貴方のおかげで戻ってこれたのも事実。感謝します。」

「戻ってきた? どこから。」

「いえ、私には妹が二人居るのですが、昔生き別れてしまい、久しぶりに姉の様に呼ばれ、あまりの嬉しさに川が見えるという幻覚を見てしまい・・・」

「それアカンやつだから!?!」

「ともかく無事で良かったよ、丁度ボス戦もクライマックスの様だし。」

すっかり忘れてたけど俺達はこれを見に来ていたのだ

「この調子なら問題無さそうだな。」

「だと良いんだけど・・・」

「ところでキリト。」

「どした？」

「確かボスはタルワールと武器を持ち換えるのですよね？」

「そうだけど、それがどうしたんだ？」

「私もβテストでしたのだが、確かタルワールとは少し違う気がするのです。」

「なんだと!？」

ボスの腰に据えてある武器に目をやる

「あれは・・・野太刀!？」

テストの時、5層辺りでモンスターが使っているのを見た覚えがある

「本当なのキリト?」

「ああ、テスト時代で飽きるほど見てきたからな。」

「問題は攻略組がきちんと対策できるか、ですね。」

「ツバルやディアベル達がいるから大丈夫だとは思うけど。」

「過信はいけませんよ、彼らとて人間。過ちを犯さないとは言いきれませんから。」

「後は俺に任せろ！」

「何をやってるんですか、ディアベルは！」

「キリト！ここつて突っ込むところじゃないよね！」

「ああ、もしそうだとしても司令塔が突っ込むバカはあいつだけだと思ってたんだがな！」

「あの方は最善策として突っ込むのです、しかし彼のそれはただの無謀な自滅策です。」

「でも仮にもβテスターだし・・・」

「この前お前に教えたはずだぞ！テストゲームで一番の命取りは慢心だと！確かに彼は元βテスターだが、彼はあくまでテストと同じように動いてる、今まで通りなら簡単だろうが、ボスは前回とは違う。それがどんな結果を産み出すかは言わずもがな、わかるだろ。」

ミイナの顔がみるみるうちに青ざめていく

「助けなきやー！」

勢いよく飛び出そうとする相棒の腕を掴む

「離して！彼を助けないと！」

「気持ちには分かる！けど丸腰のお前が行った所でミイラ取りがミイラになるだけ！お前を死なせるわけにはいかねーんだよ！」

「じゃあどうすればいいのよ！」

「1つだけ手がある、だが説明してる時間はない、とりあえずここからディアペルとの距離を教えてください。」

「距離一時の方向に80Y、10km/h。」

「了解！」

腰に付いてあるダガーを1本取り出し、一か八かディアペルの片手剣目掛けてダガーを投げる

「届けー！！！」

相棒の願いをのせてソードスキルの軌道に従い、青い光の残像は綺麗な直線を描きながらディアペルの片手剣に吸い込まれ直撃する

外部からの衝撃によりスキルが強制的にキャンセルされたディアペルはペナルティのデイレイを喰らい停止する

基本的にまずダガーごときでスキルキャンセルはほぼ不可能だがレベル差による “STRの差” にものを言わせて何とか成功することが出来た

スキルのレンジの外に入る手前のディアペルに野太刀は当たらず、掠める

「これで誰かが彼を回収してくれれば！」

しかし数十秒経っても一向に誰も動く気配はない、全員腰が引け、動くに動けないのだ

「ちっ、あの腰抜けどもが！」

あ、ミイナさんお怒りモード入っちゃった

「てやあああつー！」

誰も動かないのにと痺れを切らし、極振りの“AGR”にものをいわせ、デイベルとの距離を一瞬で詰め、動けない彼を放り投げる

「キリト、今は……」

「あいつ、人の死に人一倍敏感だから、ああいうのを見ると自分を押しさえきれなくなるんだ。」

「貴方も苦労しているんですね。」

「まったく、何より自分が武器無しという事実を忘れてるから太刀悪いんだよなあ……」

自分の剣を構え、出撃の準備を整える

「そいつが死ぬよりよっぽどマシだろ！引け腰共が！」

「せめて言葉遣い悪くしなければなあ……」

とか呟きながら相棒を今にも彼女を襲おうとする刃を止めるために突っ走る

ガキイイイインツ

速攻で相棒と刃の間に割り込みバリイで弾く

「つたく、丸腰でボスに突っ込んでくんじゃねえよ。」

呆れ顔で相棒を見ると舌先を出してやっちたって顔をしている

正直に言つて可愛い

つて、そんなこと考えてる場合じゃない！

「ぐずぐずするな！戦いはまだ終わってねえぞ！各自回復に徹して準備が終わった奴は陣形を整えラストゲージを削りにかかれ！」

周りでおどおどしてるプレイヤーに活を入れ、もう一度陣形を建て直そうと試みさせる

「ごめんキリト、また勝手なことしちゃつて。」

「構わねえよ、お前のおかげで死者は確実に減ってんだぜ。それに言っただろ、俺はお前を絶対守るつて。」

「ふふ、そうだったね。」

「っ!？」

彼女の笑顔が一瞬元相棒のそれと繋がり、嗚咽を漏らしてしまう

「後は大丈夫だ、攻略組に任せよう、手負いの敵を倒せないほどやわ

「じゃ無いだろうしな。」

「うん。」

「ぐうおおおお!!!」

「ボスの足元に何か浮かび上がったぞ!」

今までで一番どでかい咆哮か部屋を轟かした後、誰かの声に驚き振り返ると

ボスの足元に魔方陣が敷かれていた

次第にそれは緑のエフェクトを纏い始め、ボスを包み込む

「まさか、あれは!」

RPGで緑のエフェクトといえばあれしかない

「ヒーリングスキル回復能力だど!?!」

レッドゾーンに突入していた筈の敵のHPはみるみるうちに回復していき、遂に完全に回復してしまう

「ふりだし、かよ……」

EP. 5 無力さ故のはがゆさ

My Inside

「いいな！ここを動くなよ！」

「うん。」

キリトに抱えられながら入り口へと運び込まれ、そこで待つよう指示される。

「行きましようキリト、彼らの壊滅は時間の問題です。」

「ああ、分かってる。ひとまずディアベルが起きるまでの時間稼ぎだ。」

キリトがアリ姐と共にボスへと駆けていく

「……」

もう見慣れてしまった光景

迷宮区に潜り、常に隠蔽スキルとフードによって身を隠しながら、モンスターを倒しに向かう彼をただ見送るだけ

自分の無力さなどどうに理解している、

どんなに守りたくてもどんなに死なせたくなくても自分にはそのための力は存在しない

人の命に替わる命はあれど、誰かの身を守る為の力はない

その事実が虚しかったし苦しかった、どんなに死なせたくななくても自分ではどうにもできない無力さが憎くてたまらない

武器装備不可能というイレギュラーを自分の都合で引き起こされてたら、この世界がデスゲームじゃなきゃこんな思いなどしなくて済んだのかもしれない

それは誰も知らないし知る由もない

何より辛いのは、自分の身勝手にキリトを危険な目に遇わせてしまうこと、それが何よりも辛かった

見ず知らずの瀕死のプレイヤーを片っ端から単身乗り込んでいく私を口では文句言いつつもちゃんと全員守ってくれる

そんな彼に何も返してやれないのが歯がゆくて堪らなかった

取れるスキルは制限された上にスキルスロットは縮小され、レベル50の現在でさえスロットは4つしか存在していない

内1つは謎のスキルによって埋まっており、自分には必要不可欠な隠蔽と策敵で固定され、恩を返そうにも中々難しいのが今の現状だった

武器を持ってない私は“STR”を完全に捨てて、“AGR”に極振りし、戦闘回避率を上げることに専念している

「惨めだな……」

私は独りそう呟いた

目の前で自らの命を擲ってまでゲームクリアまでの道のりを進もうとする勇者達

キリトにしてみれば皆が皆義務感からやってるとかそういうものじゃないって言うけど、結局一番死に近い場所で闘ってる彼らはいつも守られている私からしたら皆勇者だ

「アリ姐……」

昨日の夕方に開かれた攻略会議が終わった後、私達に声を掛けてきた人

何故アリスさんのことをアリ姐と呼ぶ理由は単純にお姉さんという感じが当てはまるからだけじゃない

雰囲気はどこかお姉ちゃんに似ているのだ

私の家はかなり裕福な家庭であり、父は有名企業の社長を勤めており、母もまた自営業を営んでいた

1つ上のお姉ちゃんは私が小2の頃、家を飛び出していった

厳格な父と窮屈すぎる毎日に嫌気が差したのだと今は思ってる、父も母もお姉ちゃんを探すことはせず、まるで最初から居なかったかのように過ごして来た

『貴方のお姉ちゃんはね、もう死んじゃったの、だからもう帰ってこれないの。』

まだお姉ちゃんが家を出たという事実を知らなかった私に母がこう言ったのを今でも覚えてる

まだ無垢だった私はその言葉を信じ、過ごしていた

そんな私がお姉ちゃんと再会したのは小5の夏休み、学校のプールに友達と行こうとしていた時だった

記憶の片隅にあるお姉ちゃんの性格と大きくかけ離れていたものの、他は紛うことなきお姉ちゃんそのものだった

厳格な父の元で育てられてきた故に完璧主義者であり感情などま
ず外へ出すこともなかった彼女は完全に姿を消し、年相応の感情豊か
な少女になっていた

その後も幾度か連絡を取り合いこそしたけど、直接会うことは少な
かった

それでも声を聞き、生きてると分かっただけで十分だった

お姉ちゃんは中学に上がると東京から出てしまい、直接会えなく
なってしまうても連絡を止めることはなかった

そしてソードアート・オンラインのCBTにお姉ちゃんとお姉ちゃ
んの彼氏さんが入選したことを知らせるメールが届いた

『CBTは無理だったけど正規版は三人一緒に遊ぼうね!』

CBTの期間も終わった後、3人でそう誓い合った

けどその約束が果たされることは来なかった

一ヶ月後、お姉ちゃんを匿ってくれていた親戚のおじさんからお姉
ちゃんの訃報が届いた

あの日以来お姉ちゃんを毛嫌いしていた両親は葬式に出ることもお墓に行くことすらしなかった

そんなお姉ちゃんをアリ姐と重ねてしまう

『私には妹がいるのですが。』

と彼女は言っていた、そんな些細な合致までお姉ちゃんを連想させる要因となってしまう

「スイッチー！」

ふと彼らに目を向ける

端で各々陣形を建て直そうとしている攻略組の面々

部屋の中央で連携を取りながら見事な剣技でボスを翻弄し着実にダメージを重ねていくキリトとアリ姐

即席であるはずなのに長年連れたってきたパートナーのような見事な連携を私は今日の当たりになっている

「お姉ちゃん達もあんな感じだったのかな・・・」

聞くにお姉ちゃん達はどのゲームでも上位に位置していたらしい

「・・・くっ」

キリト達を見ていたら視界がボヤけ始め、そこで自分が泣いていることに気付く

彼らをお姉ちゃん達と重ねたことに泣いたのか、それとも自分が彼らと共に戦えない無力さに泣いたのかは自分でも分からなかった

「……ひびく」

ガンツガンツ

もどかしさと苛立ちと悲しさにより頭が一杯になってしまい、それでもそんな自分を嫌い、頭を何度も壁に打ち付けてしまう

ゲームだから痛みは感じないし破壊不能オブジェクトの壁が壊れることもない、ただただ衝撃による不快感だけが自分に襲いかかってきたけど、今の自分にはそれだけで十分だった

「自分の体は丁寧に扱うもんだぜ、ミイナ。」

この一ヶ月間、一番聞いてきた声、一番安心する声だけど今はあまり聞きたくなかった声

「ギ、キリト〜・・・」

もう限界だった、どんなに固く決心しても彼の声を聞いた瞬間つい本音を漏らしてしまう

「うぐっ・・・ひびく」

「ど、どうした急に。」

「女性を泣かすとは良い度胸をしますね・・・」

「あ、あのーアリスサン？」

あ、嫌な予感がする

「覚悟なさい！」

「ひえええー！ごめんなさい！」

こうしてキリトとアリ姐の鬼ごっこが始まった

キリトside

俺達はディアベルが復活し、陣形が元通りになるまでの時間稼ぎと
ディーラーとして二人だけでボスと戦っていた

聞けばアリスもレベルは40、二人だけとはいえものの10分程で
ゲージ二本を飛ばし、攻略組とバトンタッチして戻ってくると

相棒が泣きながら壁に頭突きしていました

しかも止めたら抱きついてきました

泣き顔も可愛い・・・じゃなくて！早く何とかしないと色々危な
い、主に胸が・・・じゃなくて！後ろからとんでもない殺気が飛んで
るんです！

「女性を泣かすとは良い度胸をしていますね。」

これオワタパターンじゃないですか！

「あ、あのーアリスサン？」

「覚悟なさい！」

「ひえええ！ごめんなさい！」

持ち前の反射神経でアリスの剣捌きをかわしていく

「ちよっ！アリスさんこれには訳が！」

「言い訳無用です！大人しく斬られなさい！」

結局ミイナが泣き止み、アリスを止めるまでこの鬼ごっこは続いた

「全く、それならそうと先に言ってくれば私も斬りかかることはしませんでした。」

「とりつく島もなく斬りかかって来たのそっちだろ！」

「はて、何のことでしょう？」

あ、しらばっくれやがった

「お前なあ、大体俺が避けたから良かったものの、当たりでもしてレッドになったらどうするつもりだったんだよ。」

「女性を泣かす輩に成敗を下せるならレッドにでもなんでもなりますよ。」

いつかこいつ人を殺す気がする・・・

「はいはい、下らない茶番はここまで、で？アリスはこれからどうする

の？」

「私ですか？私は一度町へ戻り、2層へ向かう準備を整えようと思っております。」

「だったら一緒に行こつ！良いよね、キリト！」

「別に俺は構わないけど。」

「その男と共に行くのはシヤクですが、ここまで頼まれて断るのも忍びありません、分かりました。ご一緒しましょう。」

「やったー！」

「はあ・・・」

「ほら、行くよキリト！」

ここから町に帰るまで憂鬱な気分一杯になりそうだ・・・

EP. 6 全てはここから始まった

ツバルside

「ぐるおおおー！」

ボスは最期に雄叫びを1つあげ、爆散した

先までボスがいた場所にはフードを被ったプレイヤー二人

空中には勝利を示す『congratulations』の文字

「よっしゃあああ!!」

俺たちは勝利を噛みしめ、喜びの雄叫びをあげる

ボスを倒した二人はさして興味なしと言わんばかりに黙々と剣を片付ける

「Congratulations、見事な剣技だったぜ、今回の勝利はお前らのもんだ。」

「どうも。」

エギルに握手を求められ、渋々といった感じで握手を返す黒のフードを被ったプレイヤー

「ありがとう、君達のおかげで誰も死なずに勝つことが出来た。」

「最初の犠牲者どころか、攻略組を壊滅まで追い込もうとした貴方がよくそんな事言えますね。」

「貴方ね、攻略組に参加せず、途中から横入りしてきて美味しいとこだけ持ってた貴方達と違って全員をまとめて率いたのよ!」

「率いてきたリーダーだから壊滅に追いやつていいと? 呆れを通り越して嗤えますよ。まさか貴方みたいな能無しが攻略組にいたとは、落ちぶれたものですね。大体参加するか否かは自分で決めること、貴方にどうこう指図される筋合いは有りません。」

「なっ!」

「やめとけ、そんな奴に構つてるとお前まで低脳になるぞ。」

「そうですね、せいぜい2層では頑張ってください。」

俺達に背中を向け、入り口へと歩を進める

「ちよっと待てよ。」

戻ろうとする彼らを止める

「なんですか?」

「俺らの代わりにボスを倒した礼だ、受け取ってくれ。」

俺の手には「アニールブレード」が二本

「どうも。」

「有り難うございます。」

プレイヤーは一本ずつ受けとり、ストレージにしまう

「ちよつと待ってくれないか？」

今度はディアベルが声をかける

「確かに今回は俺が悪かった、だけど君たちには攻略組に参加してもらいたい。そうすれば1日でも早めの解放を臨めるし。」

「嫌だね、たかが46人のパーティーの下に付くほど命を軽く思っちゃいねえよ。それに俺が人の下に付けるのはあいつだけだ。アクデイベート位はしといてやるよ。」

黒のフードから威圧と殺気が感じられる、そんな彼らに誰も言葉をかける者はおらずただ入り口へと歩を進める二人を見つめるだけだった

今思えばここが分岐点だったのかも知れない

もしここで彼らを無理矢理にでも引き留めていれば、説得してでも攻略組に参加して貰ってさえいればあんなことにはならなかったのかもしれない

俺達攻略組は1年後この選択を心の底から後悔することになるだろう

だが、この場にいる全員が知るよしもない

彼らが後にVRMMORPGの歴史上後にも先にも類を見ない最大最悪規模の重大事件を引き起こすキーマンになることなど……

キリトside

「お疲れさんっ！」

「そちらこそナイスバトルでした。」

二人だけでボスを倒し、部屋の外で待っていた相棒と合流し、先ま
で一緒に戦っていたアリスと拳をぶつけ合う

「凄かったよ二人とも！即席パーティーとは思えないほどのコンビ
ネーションじゃん！」

「え？ま、まあな・・テストの時も何度か組んだしな？」

「え、ええ。2年ほど前の事でしたが何とか噛み合って良かったで
す。」

「へえ、キリトの相棒ってアリ姐なの？」

あ、こいつちよつと疑ってやがる

「あいつは基本レイドリーダーやってたからな、その時に組んでたの
がアリスなんだよ。」

「ふーん、そうなんだ。」

上手く誤魔化せたか？

「とにかく急ぎましょう、変なタイミングで彼らと鉢合わせしたく有
りませんし。」

「だね。」

ふー、何とか誤魔化せたみたいだが注意しないと、俺たちの問題にミイナを巻き込むわけにはいかないから

「ねえキリト。」

「何だ？」

「乗っけてって、頭ぶつけすぎてクラクラする。」

「自業自得だろ！」

「ぶー、いいもん！アル姐にキリトの情報流してやる！」

「わー！それだけはやめろお！分かった、乗っけてやるからそれだけは勘弁！」

とか言っってはみるけど本当はただの照れ隠し、人との距離感が掴めなくなったあの日以来、こうやって頼られるのは久しぶりで、恥ずかしさで一杯なのだ

「締まらないでね、全く・・・」

「め、面目ない。」

「とにかく先へ進みましょう、これから先の話はまた後で。」

「そうだな。ん？アルゴからメールだ。」

『すまなかったナ、キー坊。厄介なお使い押し付けちまつテ。お礼に

「1つどんな情報でもタダで売ってやるヨ。」

「厄介なお使いね……別にそこまで心配するほどでもなかったし、ついでにLA貰えたから文句無いし」

「何て書いてあったの？」

「何でも1つ情報をタダでくれるそうだ。」

「へー、あのアル姐がねー。明日はこの世界が崩壊するんじゃない？」

「おいこら、冗談になってないぞ」

「にわかには信じがたいですね、後でとんでもない額の情報量請求されたりされるかもしれません。」

「普通にありそうで怖いんですがあのその」

「まあいいさ、取って喰われる訳でもなし、ここは1つ騙されたと思って賭けてみないか？」

「いいでしょう。しかし、もしコルを請求された時はキリト、全て貴方の自腹でお願いします。」

「うう……けど背に腹は変えられない。」

「でも、何の情報を聞くの？」

「そりゃあやっぱり」

「「髭の理由ー」」

あ、アリスとハモった

「今回のボス戦で色々伝える事もあるし、一度“ホルンカ”に戻らないか？」

「そうですね、2層で彼らに鉢合わせするのは好ましくありませんから。」

「決まりだな、メッセージは俺が飛ばすよ。アリスはアクティベートを頼む。」

「わかりました。」

『そうだな、“お髭の理由”で頼む。それとアルゴ、この後時間あるか？もしあるなら“ホルンカ”のいつものNPCレストランに来て欲しい。ボス戦で色々伝える事が出来た。それと最後に調べて欲しいことがあるんだけど——』。

アルゴに返信する

送り終わるとアリスも終わった様なので門へと足を運ぶ

「わあああ、綺麗ー。」

「やっぱここからの景色は格別だよな。」

「はい、ですがうかうかしている時間もなさそうです。」

「そうだな、さつきからアラームがうるさくて仕方ない。」

俺達が門を潜る前辺りから俺の策敵は関知していた

後方3mばかり離れた場所に一人のプレイヤー

「そろそろ出てきてくれるかな？アウラ。」

「良く分かりましたね、私だと。」

「正体不明、圧倒的強者の印象を与えられた俺らに付いてくる物好き、攻略組の中じゃお前しかいねえだろ。」

それに、ツバルからも聞いてたからな

「キリトの知り合い？」

「腐れ縁とでも言っておこうか。」

俺に向けられた相棒からの質問に曖昧だけど間違っではない回答で返す

相棒と言えど結局は赤の他人、ゲーム上の関係を崩すつもりは毛頭ない

「で、俺達に何の用だ？」

「おや、あの時の誓いをもうお忘れでした？」

忘れるもんか、あの時5人で交わした約束だけは！今でも胸に深く刻まれてる！

「忘れるかよ、あの誓いだけはよ！」

「なら話早いではないか、私もその輪に入れて貰おうか。」

「寧ろこちらから願いたい位なんだが、アリスとミイナはどうだ？」

「私は構いませんよ。」

「私もー、多い方が楽しそうだし！」

「てことで歓迎する、けどいいのか？俺達は完全フリー、ボス戦には基本参加しないつもりで動いていくけどお前はそういうわけにもいかないだろう？」

「その時が来たら勝手に抜けて勝手に戻るわよ。」

相変わらずの自由人なこつて・・・

「まあいいか、これから宜しくな。」

「こちらこそ。」

ツバルside

「本当にすまなかった！」

フードのプレイヤーが部屋から立ち去った後、暫く静寂に包まれていた

それを破ったのはディアベルだった

「ディアベルはん、頭あげえや、誰もあんさんのこと怒つとらん。」

「けど俺は皆のことを！」

「確かにディアベルあんたは皆を混乱に陥れようとした、けど誰も死んじやいない。それでいいじやないか。貴方が指揮を取っていきや、犠牲者零じやすまなかつた。」

「ツバルさん……」

「ほら、シャキツとせんかい！リーダーが府抜けてたら締まるもんも締まらんぞー！」

「ありがとう皆！よし、色々あったけど、無事誰も死なずに倒すことかできた！残り99層、先はまだ遠いけどこれでプレイヤー全員に伝えられるはずだ、このゲームはクリア可能だと！」

「うおおおお!!」

こうして長いようで短かったボス戦は終わりを告げた

謎のフードの三人のプレイヤー

未だに意図の掴めないキリト

そしてどこか心の奥底で感じる謎の不快感

本当にこの小さな一步は全ての始まりに過ぎなかった

全く関係の無い事例も元を辿れば一点に結び付くように、後に起こる大事件も全てはここに繋がるのだ

攻略組全員の目に焼き付かれた三人のプレイヤー

突然の回復能力ヒーリングスキルを持ったボス

そう、全てはここから始まった

もう狂った歯車は止まらない

?? side

「へえ、あの亜種をたった二人でねえ・・・」

白衣をその身に纏った男性は目の前のモニターの光に照らされた唇の口角を上げ、

ニヤリと笑うのだった

大零章く完く

壹章 強化詐欺

EP. 7 髭の理由

キリトside

「ここですね。」

俺達はアルゴを誘った「ホルンカ」に在るNPC経営のレストランに来ていた

「ここら辺で良いだろ。」

「けど良かったの？フード被ってこなくて。」

ほんの数時間前に2層への道が開かれたことと、お昼と言うには遅めの時間ということもあり、そこまで人はいなかった

「構わねえだろ、どうせ顔バレしてないんだから。」

「けど保証はなくてよ、声に出さなかったただけかもしれないし。」

「だとしてもコソコソする必要もないだろ、フードの方が余計怪しまれる。」

「それもそうね。」

「あー、ご注文はお決まりでしょうか？」

店員であるNPCが注文を聞きにくる

「コーヒーをお願いします」

「同じく。」

「かしこまりました。」

ここに来たのは俺とアウラの二人だけ、残りの二人は訳あって先に宿屋に戻ってもらっている

「遅れて悪いナ、少し手間取っちゃっテ。」

「いいよ、俺たちも今来た所だったし。座りなよ。」

と言ってアルゴに向かいの席に座るように促す

「それデ？おれつちに言いたいこととハ？」

「どうせあんたの事だ、既に耳には入ってるだろうが改めて言う。ボスの変更点についてだ。」

ボス討伐から小一時間しか経ってないが、こいつの情報網は侮ることなかれ、どっから仕入れたんだと疑うレベルの情報さえ数十分で耳に入れてくる

「タルワールが野太刀に変えられた事力？それならアーちゃん達から聞いているゾ？」

「いや、まあそれもそうなんだけど。」

「他にあったのか？」

明らかに武器変更以上に伝えるべき筈の情報をまさか耳に入れないのか？武器変更だけなら慣れ云々でなんとかなるならともかく回復能力は初見じゃ大変な所がある

発動条件は分からないが一層のボスから使ってきたんだ、これからのボス・・・

否、最悪フィールドのmobにさえ使われる可能性もある、早急に伝えるべきじゃないのか？事実、攻略組でさえあそこまでパニックだったんだ、中層や低層プレーヤーが遭遇したらそれこそ危険だろう

「実はですね、ボスが自動回復を使ってきたのです。しかも全快の。」

「ナ、なんだって!?!」

「本当に聞いてねえのか？」

「当たり前だ口、そんなとんでもない変更点、俺たちが伝えない訳ないだ口。」

「そうですね、それにしても何故攻略組はこれを隠したのでしょうか・・・」

「あまりにも未知数だからナ、ある程度様子見してるんじゃないか？」

確かに余りにも未知数だ、発動条件の分からない変更点イレギュラーを広めて下手に集中力を欠かせるような事になれば自滅しかねない

だけどなあ・・・

「流石にちよつと見損なつたな。」

「同感ね。」

「ま、あいつらの考えを理解するだけ時間の無駄だな。アルゴ、この情報の公開の是非はお前に託す。いいか？」

「了解した。」

「じゃ、よろしくな。」

「おうー。」

カランとドアの開閉を告げる音がしてアルゴは店を発った

なんか忘れてるような気がするんだけど・・

「ところでキリト、アルゴに用があったのではないのか？」

「あ、髭の理由聞くの忘れてた！。ま、いつか、女性の身辺的特徴の理由を聞くのは野暮だしな！」

「……」

あのー、そんなジト目で見るの止めてくれませんかねアウラさん

「あれ、アルゴ？」

彼女のジト目から避けるように窓に目線を移すと、アルゴが逃げている最中だった

「あいつのAGIに追い付く奴なんているのか？」

「貴方の所の相棒ちゃんがそうじゃなくて？」

いやまあ確かにアルゴどころかインクラッド最速だろうけど
さ・・・

「あいつがアルゴを追いかけ回す理由無いだろ？あいつだな、追いか
け回してる犯人は。」

「趣味悪いわ・・・」

いかにも忍者が着てそうな袴装束を着た二人組がアルゴに詰め
よっている

「あいつらどっかで見たことが・・・」

「そうなのよねー、私も見たような気がするのよねー。」

「なんて言ったっけな、フードじゃなくて・・・フーガじゃなくて・・・」

「ま、どうでもいいですわ。今は彼女を助けませんと。」

「だな。」

この店は先払いなので金を置いていく必要もないだろ

駆け足で店を出て、アルゴと二人の間に割って入る

「お主達、何用だ？」

「そうでござる！拙者らの邪魔をしないで欲しいでござる！」

「あーもう、だから！この情報は売らないって言った口！」

「では何故教えないでござるか！拙者らは情報料金を払う前提で交渉を持ち掛けているでござる！エキストラスキル『体術』の獲得方法を!!」

「何!?エキストラ・スキル、『体術』だと!？」

「駄目ダ！これだけは教えたら恨まれること間違いなしなんだ！」

「持っていると云ったにも関わらず、何故交渉に応じてくれないでござるか!?これは明らかに情報料金を引き上げるのを狙っているのも同然でござるぞー！」

「俺たちとしてはお前らの悪行は見逃せないな。」

「まさかお前ら伊賀者か!？」

ん？伊賀者？伊賀者、イガモノ、忍者・・・

は！

「もしかしてあんたら風魔の・・・」

「(ぎぎるー)！」

風魔の二人組はβテストにも居た、高めのAGIに物を言わせて美味しいとこだけ持っていくコンビ

「風魔だか風太だか知らないけどね・・・」

風魔の二人の顔がみるみるうちに青ざめていくのが分かる

あ、これアウラさんお怒りだ・・・

「いぎるうううう!!」

冷や汗垂らして全速力で彼らは逃げていった

「まったく、女の子を追いかけて回すなんて女の子の敵だわ!」

「相変わらず女の子を引つ提げてるんだナ、キー坊は。」

「人を腰巾着みたく言うのやめてくれませんか?物じゃないんですから。」

「ニヤハハ、そいつは悪かったナ。まあ助かったヨ。」

「それで?何したんだよアルゴ、あの二人凄い剣幕だったんだが。」

「仕方ない、キー坊達だけ特別に教えてやるヨ。」

「ああ、それとエキストラスキルについてもな。これは助けた対価として、だ。いいか?」

「分かったヨ、元々教える約束だったしナ。」

「ん?髭の理由か?」

「受ければ全て解けるヨ、正し教えるには条件がある。」

「その心は？」

「絶対にオレっちを恨まないことダ！」

「何言ってるんだ？ エキストラスキル獲得方法を教えて貰って恨むっておかしいだろ。」

「違うんだ、キー坊。大体の恨みってのは一晩寝れば忘れるサ。けど、これは違う・・・間違えれば一生続くんだ！」

「どういうことだ？ 益々意味がわからなくなってくる

「大丈夫です、私たちは貴方を恨むようなことはしません。」

「なら交渉成立だな、着いてこいヨ。」

「なあアウラ。」

「何でしょう？」

「お前このスキル、今取らなきや駄目か？」

「数日後にはまたツバルさん達と二層の攻略を始めるつもりですので早い方がよろしいですね。」

「ならアルゴ、俺はクエストが受けれる場所だけ聞いて終わるよ。アリスに怒られそうだし・・・」

「そうなのだ、ミイナはともかくアリスに黙ってクエストをやると怒鳴られそうだからまらないのだ」

「そういえばリーちゃん達がいなかったナ。喧嘩でもしたの力？」

「んなわけないだろ、買い物だとさ。」

「おや？相棒さんは構わないのですか？」

「あ、あいつはまだ武器に慣れてないからな！もう少し後に取らせようとお、思ってるんだ。」

あいつの謎のスキルの全貌が分からない限り、広めるのは好ましくないと思う

「そうダ、始めに忠告するけど野宿は覚悟するんだナ。寝袋持った力？」

「どんなクエストだよ・・・」

・・・

「着いたゾ、ここがエキストラスキルを取れる場所ダ。」

「なーんもねえな。」

「そうね。」

俺たちがいるのは岩山、とくにこれといった目立つものは無く、ただ一人の爺さんが立っているだけ

「試練を受けに来た者達か？」

NPCである爺さんが話し掛けてくる

「はい。」

「修行は厳しいぞ?」

「覚悟はできております。」

「ならば修行の証を付けよう。」

すると爺さんはどこからか小さめのツボを取りだし、筆を中に入れて、取り出したと思えば、アウラの頬に何かを書いていく

「それでは我が弟子よ、それは修行が終わるまで取れんぞ。修行が終わるまでこの岩山から出ることは一切禁ずる。試練はこの大岩を割ることじゃ。健闘を祈る。」

「そうか、アルゴはこのクエストがクリア出来なかったからこの髭を付けてたのか・・・」

「流石はキー坊鋭いナ!その通りだヨ!」

「褒められてる気がしないんだが・・・」

「ということは私の顔にも付いてるのですか!?!」

アウラがこちらに顔を向ける

そこには髭を書かれたアウラがいたのだが
正直に言ってこれは・・・

「似合ってる。」

アルゴとハモったのは不覚だが、アウラが似合ってるのは本当である

完全に猫そのものだ

「似合ってるヨ、猫みたいデ！」

「うん、すつごく似合ってる。」

「そ、そうですか？」

「これはリーちゃんとかキー坊の出来が楽しみだな！」

「お前には見せないぞ。」

「ケチ！」

「ケチで結構！お前に渡すところくなことにならねえんだよ！」

「ブー。」

「そんじや俺は帰るから。アルゴ、ショートケーキ忘れんなよ！」

「分かってるヨ。」

後ろから冷たい視線が送られてきたが、俺は無視することにした

No side

「・・・本当にいいのかね？」

「構いません、それでアイツの仇を取れると言うのなら！」

研究室らしき部屋に三人の人間がおり、内一人は横になり機械に繋がれていた

「君がそれを望むなら私はこれ以上は追求しないさ、ただ、本当にいいのかね？最悪もう二度と会えなくなるかもしれないのだぞ？」

「それでも指を啜えて待つよりはマシです。」

「分かった、なら思う存分暴れるがいい。」

そう言うとき女性は1つのナーヴギアを手渡す

「もう準備は整えてある、後は入るだけだ。」

「何から何まで、ありがとうございます。」

「私も彼女には興味があつてな。こちらとしても願ったり叶ったりなんだよ。」

「そうですか。」

男は備え付けのベッドで横になり、ナーヴギアを被る

「リンクスタート！」

「君には感謝しているよ、出来れば構わない、だが早めに連れ戻してくれよ・・・」

眠ったように動かない彼らを見つめる女性の目尻に涙が浮かぶ

「私の娘・・・“アリス”を！」

EP. 8 キリトの苦難

キリトside

「…………ふにゆう。」

「…………どうしてこうなった。」

現在、俺は絶賛苦悶中である

何故かと言えば、遡ること半日前

……

5日前にアルゴから手に入れたエキストラスキルの情報をアリス達に伝え、話し合いの結果今日取りに行くことに決めた

それでこの岩山に戻ってきたわけだが、肝心の岩は想像以上に硬く、アルゴの言う通り、一日やそこらで終わる代物でもなく、仕方なく野宿で夜を過ごすことになり、いざ寝袋を出してみれば二つしかない

少年漫画でたまにある1つだけ二人用！なんて美味しい展開もなし―あってもお断りだし、女子二人なので俺ははみ出されるのだが―なのでアリスと相棒に1つずつ渡して、俺は雑魚寝をすることとなった

「たまには悪くないな。」

幸いどんな格好で寝ても寝違えることはないから岩の壁に寄りかかって寝ることにする

「それじゃおやすみー。」

「おやすみなさい。」

「おう、お休み。」

二人に挨拶を交わして、目を閉じれば夢の世界へと誘われる

・・・

眠ったまでは良かったのだ、だが問題はその後だった

「・・・うん？」

まだ日の昇らない、真つ暗な時間に俺は目を覚ました、朝が苦手な俺はまだ覚醒はしておらず、靄がかかったような視界で辺りを見渡す

左腕に違和感と重みを感じた俺は左腕に視線を移す

するとそこには・・・

何故かミイナが腕に抱きついていた

「っ!？」

驚きの余り、声をあげるところだったが、寸での所で思いとどまり、声にならない声を上げたところで冒頭に戻る

「風邪引くぞー。」

寝袋から這い出てきたのか、寝る前に入ったであろうそれは奥の方に放っぽりだされている

彼女を寝袋まで戻す気力も湧かず、仕方なく自分が敷布がわりに使用していた長めのブランケットを共用することにする

相棒を少しでも温めるために、彼女を膝の上に横向きで寝かせ、その上からブランケットを被せる

「こうして見るとスグハに似てるよな・・・」

まだあどけなさの残る、幼すぎる相棒の顔を見つめ、呟く

デスゲーム開始当初、昼のモンスターと向き合う真剣な眼差しとは違って変わって、夜死に対する恐怖で震え、涙を流した年相応の少女

どちらが本当の彼女かは考えなかった、ただ目に写る全部が彼女自身なんだと解釈してきた

なら目の前の彼女はどうかろう？泣くことも無くなってきた彼女が代わりに見せてくれたのはまた別の一片

人懐っこさ満載の少女だった

俺は彼女のことは何も知らないし逆もまた然り、

い
とはいえプライベートに突っ込む気もないし突っ込まれたくもな

い
あくまで相棒としての役割関係ロールプレイ、その境界線を踏み越える気はさら
さらない

「……お姉…… ちゃ……ん。」

ふと耳元でそんな呟きが聞こえ、起こしてしまったかとミイナの方を向けば、彼女は寝てこそいたが、心なしか切なそうな顔で涙を流していた

「お姉ちゃん……か。」

アルゴが言うにはミイナの姉は二年前に亡くなったという

二年前と言えばあの日、だよな……

記念すべきCBTのサービスが終了した日、そして忘れもしない大きな事件が起こった年

俺にはどうしても偶然とは思えなかった

「まさか……な。」

俺の頭の中に1つの答えが浮かび、そして消えていった

その考えを肯定することはできない

なぜならそれは……

それは……

あいつが「起きてたのですか？」

突然思考を何者かの声に遮られる

ミイナは寝ているので残るは一人のみ

「悪い、起こしてしまったか？」

「たまたま目が覚めてしまったのです。そしたら貴方が起きているのが見えました。」

「そうか。ところで岩はどのくらい進んだ？」

「後半分という所ですね、そちらは？」

「こつちも同じくらいだな。どうする？」

「急ぎの用事ありませんし、今はゆっくり休みましょう。これが終わればまた忙しくなるのでしょうか？」

「ああ、欲を言えばミイナだけでもゆっくりさせたいんだけどなあ・・・」

派手にボス戦で暴れたが、フードと変装のおかげもあり、幸い俺達とバレル事はなかった

お陰でフィールドにフードを被る必要も無く、誰かに追われるような事も無く、静かに過ごせるかと思ってたが、忙しさが和らぐことはなかった

ゲームの中とはいえ、気力が永遠に続くという訳ではない、1日の殆どを“始まりの町”で留まっているプレイヤーや、フィールドで戦ってるプレイヤーの手助けに当てているハードスケジュールなのだ、俺やアリスはともかくミイナは何度も倒れかけている

本当なら3日程休ませてやりたいが、生憎プレイヤーは待つてはくれない

俺がどんなに言ってもミイナは聞く耳を持たない

「アリス、たまにはミイナと息抜きしにいつてくれないか？女性同士、積もる話もあるだろうし。」

流石に俺が誘っても断られると思う、悲しいけど

「彼女を休ませたいというその意見には同調します。ですが、貴方も一緒に誘わない限り彼女は縦には降らないでしょう。」

うーん、アリスでもダメなのか・・・

「あいつってそんなに意固地だっけか？」

「はぁ・・・」

なんかため息つかれた!?

「な、何!?!俺変なこと言った!?!」

「やはり無自覚ですか、元相棒さんも大変ですな・・・」

アリスがジト目でこちらを見てくる

「な、なんでそこであいつが出てくるんだよ!」

「とにかく!相棒を休ませたいのなら、パートナーらしく連れ添いな

さいということですよ！わかりましたか！」

「は、はい！アリス様！」

アリスの突然の剣幕に押され、勢いよく返事をしてしまう

「……………うにゅ？」

俺達の叫び声で起こしてしまったのだろう、足元から奇妙な呻き声が聞こえ、目下の黒くて小さな山がモゾモゾと蠢く

「おふあよ……………きりゆと……………」

まだ朦朧としているのか瞼は殆ど上がっておらず、呂律もまともに回っていない

「おはよ、悪いな起こしちゃって。まだ遅いから寝てていいぞ。」

「ふにゅ……………」

いまだ回りきっていない呂律で喋りながら寝起きによりフラフラと立ち上がり、おぼつかない足取りでそのまま寝袋に戻るのかと思いきや、そのままお腹にダイビングヘッドを食らわしてきた

「ぐふおっ!?!」

見事に彼女の頭は鳩尾に当たり、俺はなんとも情けない声をあげてしまう

さらに彼女の頭はそのまま下がっていき、傍から見ればアレに見えるようななんとも不格好な体勢に……………

「何をやっているのですか・・・」

やめて、アリスさん、そんな哀れな人を見る目でこちらを見ないで、これは俺のせいじゃないから！・・・多分。

「・・・むにやあ」

完全に寝ぼけた状態で俺の上半身をよじ登ってきて、腰に手を回され、抱きつかれる

「お姉ちゃん・・・」

また彼女の口からその言葉が漏れる

彼女の詳しい歳は分からないけど、恐らく俺よりも年下、スグと同じ位だと予想はしている

「(泣いてる?)」

彼女を横から見てみると一筋の線、彼女は泣いていたんだと気づかされる

「・・・」

顔は胸に押し付けられ、見ることは叶わない、けど予想は付く、涙で一杯なのを精一杯我慢してるのは察しが付く

「悪いな、頼りないパートナーで・・・」

目の前の少女に突然母性本能を擦られ、衝動的に頭に手を置き、撫

でてしまう

昔、スグとの仲が良好だった頃、よくしてあげたのだ

「少なくとも彼女はそうは思ってませんよ。」

「そうかねえ・・・」

「自分の相棒位、信じたらどうですか。」

「確かに相棒だよ、けど結局はそれだけだ、それ以上が有るわけでもそれ以下に下がる訳でもない。」

俺とミイナの関係をこれ以上深めるつもりは全く無い、あの事に巻き込まれて欲しくないから

「はあ・・・よくそれで前相棒さんとやっていきましたね。」

今日2度目の溜め息をアリスにつかれる

「あいつとは同級生だったからな。逆なんだよ、順番がな・・・」

そう、前相棒とはゲームで知り合ったんじゃない、現実世界あつちで知り合って、相棒になった

だから互いの過去も知ってるからこそ俺はあいつとずっと組むことが出来たのだ

「あいつ、今頃何してるかな・・・」

「そうですね・・・またどこかのタイトルで暴れてるのではないですか

「？」

「ははは、違くない。」

互いに笑みが溢れた後、俺はふと空を仰いでみる

「すげーキレイな星空だ。」

「もう少しまともな感想はないのですか、雰囲気ぶち壊しです。しかし、この星空が素晴らしいのは同感です。」

仰いでみればそこに在るのは空一面を覆い隠す満天の星空

実際は全てプログラムなのだが、輝きは本物のそれと遜色無い

「こうやってマジマジと星を見たのは何年ぶりだろうな・・・」

俺の住む埼玉とて星は見えるが、周りの明るさのせいで余り見えな
い

確か四年前に何かの都合でとある村に寄せてもらった時以来かな

「初めて見ましたね・・・」

彼女は返すも、語尾が小さくなり、遂には消えたかと思えば、肩に
重みがかかってくる

「おいおい勘弁してくれよ・・・」

横を見ればアリスが俺の肩を借りて寝ていた

ミイナに抱きつかれているせいで動くこともできず、かといって彼女を起こす勇気も出せず、寝たくても眠れない状況に陥ってしまう

「俺、朝まで持つかな……」

結局、彼女たちが起きるまでの五時間、ずっと起きている羽目になっちゃった

n o s i d e

まだ夜も更けぬ草原のフィールドに一人、男が立っていた

「生ぬるい……」

彼の周りで青い光片が飛び散っていく

そこに残っているのは数本の剣と装備品のプレートが数個、それはそこでプレーヤーが死んだ事を指し示す

ならば彼が殺したのか？否、それも違うだろう、現に彼のカーソルは緑のまま変わらない

「こんなもんじゃねえだろ、partyはよお！」

彼は一振り剣を振るう、振るわれた直剣は一体のボアを貫き、爆散させる

「もつとハラハラドキドキするもんだろお！デスゲームなんだからよ！」

彼は何かに怒り、そして怯えていた

彼の名は P o h、後にその名はアインクラッドを震撼させるほどの事件により、有名になるのだが、それはまたのお話

「ここまで来いよ、そして共にこの世界を壊そうぜ・・・」

一区切り付けて、目の前の m o b を爆散させる、そしてもう一度息を吸い込み

「キリト！」
brother

EP. 9 秘められし悪意

ツバルside

一層攻略から2週間が経ち、死亡するプレイヤーも少なくなってきた頃、俺とはある街をぶらぶらしていた

「あれ、ツバル君じゃない?」

突然後ろから声をかけられ、振り返るとそこにはアスナとラウルが立っていた

「おお、アスナ達じゃん!こんな所で何してんだ?」

「ここに新しくプレイヤーが営む鍛冶屋が出来たって聞いてね、試しに打って貰おうかなって相談してた所なの。」

「どうツバルもよろしければ?一緒にどうです?」

「俺はいいかな、強化は終わらせてるし。けどプレイヤーメイドか、興味あるから着いてっていい?」

「構いませんわ。」

ということ、俺ら三人はその鍛冶屋の店に行くことになった

...

「はいね。」

「先客が居るみたいだな。」

店内を見てみれば男3人、女3人のパーティーらしき御一行が鍛冶師に剣を打ってもらっている最中だった

「結構かかりそうね。」

「ええ、少し時間を潰そうかしら。」

やけに見覚えのあるプレーヤーがいて、気になりはしたが、頭の隅に追いやり、露店を出している近くのNPCから饅頭を1つ買い、頬張ろうとしたその時だった

パリン

無機質な金属音が小さく鳴り渡る

「な、何? 何の音!」

「落ち着きなさい、剣が割れた音です。圏外ならともかくここは圏内、主が死ぬことはなくてよ。」

「発生源はあそこだな。」

目の前に建つ、一軒の鍛冶屋を指差す

数分の沈黙の後に中から声が聞こえてくる

「も、申し訳ありません…。私にもどうしてこのような事態になってしまったのか、検討もつかないのです…。」

「分からないだあ!?! ふぎけるなよ! 俺達がこの剣1つ手にするために

「どれだけ苦労したか、鍛冶師のお前に分かるかよ！」

「落ち着けよ、鍛冶師に怒ったって剣は返ってこないんだ、それに強化の失敗は俺たちも承知の上、俺らに彼を責める資格はないぜ。」

《small》「分かってますよ！けどさ、こうでもしねえと、あいつが報われなく思えてなんねえんだ！」《small》

結構離れているのにこの大きさ、相当怒りが溜まっていると感じられる

「どうしたのかな？」

「多分武器の強化を鍛冶師が連続で失敗したんだろうな、それで血が上ったんだろ。」

「けど、さつき武器が壊れた音がしたわよね、それも彼らってことでしょ？確か強化失敗はプロパティ減少と入れ替え、強化素材ロストの3つの筈よ。」

「正式プレイで追加されたのかも知れなくてよ。」

少し落ち着いたのか、中の声が完全に聞こえなくなる

位置関係によって、彼らの顔は見えないが言い争いをしていることはそれとなく分かる

「誰か出てくるわよ。」

中にいた御一行の内の一人の女性プレイヤーが飛び出していき、それを追いかけるようにして一人の男性プレイヤーが飛び出す

「追いかける？」

「いや、やめといた方が良く。事情も知らない俺らが行ったところでどうしようもないだろ。彼らに任せよう。」

「ですね、それでどうしますか？強化しますか？アスナ。」

「今日はこの辺にしておきましょう、少し自信がなくなりました・・・」

「仕方ない、今日は強化素材だけ集めて明日改めて強化に出そうか。」

「ええ。」

「ですね。」

俺達はその場を後にし、フィールドへと足を進めた

素材集めが終わる頃の夕暮れ時には、彼らの事は完全に忘れてしまっていた

・・・

N O s i d e

「いやあ、勝った勝った！」

「むきゆう・・・」

辺り一面をオレンジ色に染め上げる夕日に照らされ、ツバルは喜びを露にし、アスナは項垂れ、ラウルは呆れていた

「おっし、アスナの奢りな！」

「うう… 余りお金使いたくないのに…」

「言い出しつぺが何を言う。」

強化素材を集めに来た彼らはmobを倒した数で競い合い、賞金として「トレンブル・ショートケーキ」を賭けて、結果アスナが負けたのだ

「ほら、私とワリカンで構いませんから。」

ラウルがアスナに手を差し伸べる

…

ツバルside

「はあく、美味しかった！」

「行儀悪くてよ、ツバル。」

俺達はアスナの奢りでとあるNPCレストランでシチューセットとショートケーキを食べた俺達は今後について話し合い始めた

「それで、これからどうする？」

「私はこれから強化に行こうかしらね。ツバル君は？」

「俺は良いかな、今日は色々疲れた。」

「私も寝かせていただきます、明日は朝早くから用事がございますゆえ。」

各々これからの予定を語り、その場を離れようと席を立とうとする

「おっ？」

ウインドを弄っていたツバルが声をあげる

「どうしたの？ツバル君。」

「さっきのショートケーキにパブ効果が付いてたみたいだぜ、それも『幸運』のな。」

「本当ですね、βには無かったので正規版からの追加でしょう。」

「もしかしてこれって強化の成功確率に左右されたり・・・」

アスナが目を輝かせて二人に問う

「うん、確か。」

「なら一緒に鍛冶屋に来なさい！いいわね！」

「え、でも俺迷宮区に・・・」

「分・か・つ・た・わ・よ・ね・？」

「（見える・・・アスナの後ろに鬼神が・・・）」

席を立ち、仁王立ちで細剣を突きつけるアスナ

「ヨロコンデゴイツシヨサセテイタダキマス。」

「合格。店はさっきの店にしましょう。探すのも億劫だし、興味があるしね。」

・・・

ツバルside

「さ、行きましょう。」

アスナに頼まれ、昼頃に行く予定だった鍛冶屋に着いていくことになり、今店の前に立ってるのだが・・・

「・・・隠れてないで出てこいよ、アルゴ。」

俺は店に入る前に後ろで隠れてるアルゴに声をかける

「ニヤハハハ、見つかったちやったナ。キー坊以外に俺っちを見つけれんとはナ。」

「ア、アルゴさん!?!」

「ほぞけ、《隠蔽》スキルも発動させてないお前を見つけれないやつを探せて方が無理な話だ。」

まあ、アスナは見つけられなかったようだけど

「で、アルゴが何でここにいるんだよ?」

「少し頼みたいことがあってナ。その鍛冶師である『ネズハ』についてなんだけド……」

「彼がどうかしたのか？」

「いやナ、ここ最近武器が強化に失敗して破壊される事故が多発してる訳だが、その要因全てがそのネズハによるものだそうダ。」

「そういえば、私達もその現場を見ました。」

「そこでダ、ツーク坊達には彼を調査して欲しい。勿論依頼料はしっかり払うヨ。」

「分かりました。」

「良いけどもう少し情報はないのか？それだけだとなあ……」

「生憎それだけだヨ。なあニ、キーク坊達も協力して貰ってるんだ、直ぐに集まるヨ。」

「だと良いんだけどな、まあ俺達は3日後に攻略会議が行われるんだ、ちゃんとした調査は中ボスを倒してからになりそうだな。」

「そうね。」

「じゃ、何か分かったらメッセージ頼むヨ。」

た
そういつてアルゴは俺達に手を降りながら転移門に向かうのだっ

・・・

今俺達はフロアボスがいる場所に向かう道中を一層に続くレイドリーダーであるディアベル指揮の下、前回よりは少し軽めの雰囲気です歩いてた

「今回のフロアボス戦、ツバル君はどう見るの？」

道中で出くわす普通のmobは前衛のプレイヤーにより狩り尽くされ、俺達に回することは殆ど無く、黙っているのに痺れを切らしたのかアスナが話しかけてくる

「どう？って言われてもなあ・・・この世界の本番は3層からだし、ディアベルのカリスマ性と情報量があれば苦戦する相手でもないさ。」

「そうよね。」

「ただ1つ気になるのよ。」

「と、いいますと？」

「パシネットみたいな物を被ったプレイヤーがいるパーティーいるじゃない？」

ラウルが前方でmobを倒してる1つのパーティーを指差す

彼らは今回から攻略に参加した、言わば新参者、平均レベルは俺らより少し低い程度、しかし彼らの装備はどれも一級品、それでも技術はとってつけたレベル

なので一軍ではなく予備隊として参加させている

「知ってるわ、彼ら偵察隊に入れてくれて頼んできたのよ。」

「マジで?。」

「ええ、確か名前は真ん中がオルランドで、左がクフリーンで、右がベオウルフだったかしら。」

伝説の英雄に王国騎士、更には勇者ね・

「これまた大層な名前なこった・・・」

「あら、大層なのは名前だけじゃなくてよ、彼らギルド名まで決めてるらしくて確か・・・」

「レジエンドブレイブス」、でしょ。」

「そうそう、それぞれ・・・って、え?。」

突然後ろから声が掛けられる

俺達のパーティーは列の最後尾、今回は5人の予定だったがヒデが急用で出れなくなり、ここにはいない、つまり声の正体は・・・

「シズク!お前いたのか!。」

「いたのか!は無いでしょ!?ずっと後ろにいたのに!。」

ぶーと頬を膨らませて抗議する彼女、別段彼女の影が薄い訳ではない、単純に忘れてたのだ

「それで、話は戻るけどラウル、彼らがどうしたの?。」

「彼らのレベルって私達攻略組の平均より低いわよね?。」

「ええ。」

「それなのに装備だけはトップクラス、何かあるとは思わなくて？」

「そりゃあ俺たちの知らない効率の良い稼ぎ場を見つけたとか？」

「その考えも否定できなくは有りませんが、鼠がそれを見逃さないはずありませんし。」

「じゃあ何か？あいつらには裏があるとしても？」

「そこまでは分からないわよ。けど、彼らを注視すべきことだけは確かなようね。」

「ともかく今はフロアボス戦です、いくら負ける要素がないとはいえ油断大敵、気を抜いてると死ぬわよ。」

「そんなもん百も承知さ、俺達は湧きmobの殲滅、パターンも今までのフィールドmobと同じで足を狙うこと。」

「この階層のテーマは牛ばかりの岩場と平原、嫌というほど倒してきたのだ、万が一にも死ぬことはないと思う」

「皆！今回も集まってくれてありがとう！今回も誰も死なずに、ボスを倒そうじゃないか！」

レイドリーダーであるディアベルの掛け声にメンバーは自ら空気を盛大に震わせた

「行くぞ、お前ら！」

「ええ!!」

EP. 10手がかり

ツバル side

ピロリン

小さな着信音が俺たちにメッセージの受信を知らせた

『今からいつもの場所で』

差出人はアルゴからだった、彼女らしい余計な言葉は付け足さない
用件だけを簡潔に載つけた文、それでもそこには重大な何かが含まれて
れているような気がした

「なあ、お前ら・・・いや、聞くまでもねえな。」

パーティーメンバーの二人にも伝えようと振り向いたが、彼女らの
何かを伝えようとしている様子から悟ることができた

「ということはツバル君も?」

「ああ、アルゴからな、お前らこの後何も無いよな?」

「ええ。」

「そんじゃ行くか。」

俺達は三日前に足を運んだばかりのレストランへと歩いていっ
た

・・・

「よ！ツバルじゃんか！久し振り！」

「は、初めまして！」

「ニヤハハハハ！」

「……」

今俺は盛大に顔をひきつらせながら目の前の状況を見ていることだろう

俺達はアルゴの指定した店に入った瞬間、固まることとなった

「どうしてキリトがここに？そしてその子は誰だ？ついにお前にも彼女か!？」

「か、かかか、彼女!?わ、私にとって

キリトさんは命の恩人というか何というか、そういう関係じゃない
というか……えつと……そのー……」

俺がキリトとの関係をからかってやると彼女は突然顔を赤らめ始め、急に内股で手と足を擦り始め、モジモジし始める

声はだんだん尻窄みになり、誰が見ても彼女は彼に恋をしているのは一目瞭然である

「なわけねえだろ。」

「いてっ！」

「はあ……」

尚、肝心の朴念仁には一ミリたりとも伝わってなさそうだが・・・
そもそもキリトにはあいつがいるから無理ないと言えばそこまで
か・・・

「おっと、紹介が遅れたナ。彼女は現在キリトとパーティーを組んで
るルリダ。」

「名前は問題じゃない、肝心なのは何故こいつらがここにいるかだ
よ。」

「そりゃ勿論彼らがツブ坊達に頼んだ調査の依頼人だからサ。」
クライアント

「ルリさんね、私はアスナ。よろしくね。」

「・・・よろしく。」

アスナは彼女に手を差しのべ、挨拶をする

しかし、それは逆効果になり彼女はキリトの背後に隠れてしまう

「ははっ、怖がられてますよアスナさん。」

「う、うるさいっ!」

「うおっと、あぶねえな!だから初対面の相手にさえ怖がられるんだ
よ!」

恥ずかしさのあまり高速で突き出される細剣を顔だけで余裕綽々
で躲すキリト

あいつの反射神経は下を巻く、CBTの時のボス戦では必要不可欠
なものだった

「悪いガアーちゃんは外してくれるか？彼女がこの状態だと進まないからナ。」

「仕方ないわね・・・」

渋々といった感じでアスナはお店を後にした

「悪いナ、どうもアーちゃんはキー坊達と相性が悪いらしい。」

「いつも彼女、彼の愚痴を溢してましてよ。」

「・・・マジ？」

「キリトさんは悪い人じゃないです！失礼です、アスナって人！」

「大丈夫、アスナはそういうことで怒ってるわけじゃないから。」

キリトを罵られ少々ご立腹のご様子のルリを頭を撫でながら慰める様子はまさにカップルそのものである

「にしても彼女、どこかで見たような・・・」

「あれでしてよ、ほら三日前の。」

日本人らしい黒髪を肩下までスツと伸ばした髪、キリトよりも少し低めの身長に幼い外見と裏腹に大人びた表情

三日前にプレイヤー鍛冶師から飛び出した少女そのものだったのだ

「ああっ！」

「そうサ、彼女は今回の被害者であり、また謎を解く手がかりを握る人物でもあるんだ。」

「とりあえずお前らには事の顛末を話そうと思う。」

キリトによれば4日前、森の秘薬クエストで苦戦していたパーティーを助けたついでとしてアニールブレイドの強化に付き合うことになり、鍛冶師の所で強化を行った所、強化失敗により、彼女の剣は紛失かに思えたが、キリトのおかげで取り戻したという

「それがどうしたんだ？」

「なあお前ら、レジエンドブレイブスってパーティー知ってるか？」

「知ってるもなにも、つい昨日共闘してきたばかりよ。」

「そうか……」

キリトが少し渋そうな顔になる

「彼らがどうかしたのか？」

「シー……ちよいと困ったことになってるかもナ。」

「ああ、もしやとは思ってたがここまでとは……」

二人して頭を掻き悩み始める

「ちよっと待って、最初から詳しく説明してくれ、全く話が読めないんだが。」

「最近増え続けるプレイヤー鍛冶師における強化失敗の武器破損の事故、それを俺らは事件、つまり鍛冶師の故意的破壊と俺達は見てるんだ。」

「なにい!？」

「なんですって!？」

キリトから発せられた言葉に驚き二人して叫んでしまう

「根拠は？」

「俺はルリの剣を取り戻した後、俺は鍛冶師の後を着けたんだ。彼はパーティーと合流し、とある宿屋に入っていった。その後、アルゴに頼みそのパーティーについて調べて貰ったんだ。」

「あいつらは最近頭角を現し始めてナ、

いつかはギルドまでつくるらしいんだ。その名が『レジェンドブレイブス』だそうダ。」

「なるほどな、レベルと装備が合ってなかったのは詐欺して騙し取った剣を売ったから・・・」

「事情はどうであれ、彼らがやってるのは犯罪混じりの詐欺行為と相違ない、そんなことを平気でやってるやつらが力を付けてみる、俺達に未来はない。」

「お前らはしないのか？」

「顔バレしてる俺達よりは適任だろ。」

とにかくお前らにはこの事件の裏を取って欲しい。確信が持てた

ら俺達に教えてくれ、彼には用がある。」

「勿論おいら達もアシストはするヨ。」

「了解。」

...

「それデ？ ツー坊はおれっちに何の用ダ？」

その後、会合は解散となり、アルゴと俺以外全員この場を去っていった

「わざわざアスナを外させた理由と、キリトの元相棒についてだ。」

「バレてたカ・・・」

「お前らしく無かったからな。」

「ツー坊には知っておいて欲しいんだ、キー坊が何故頑なに攻略組参加を拒んでいるのかヲ。」

「いいのか？ そんなん話して。」

あのアルゴにいくら積んでも話す気は無いとまで言わしめた情報、それをあつさりとアルゴの口から飛び出るのは思ってもみなかったが、嬉しい誤算なのかもしれない

「キー坊には堅く口止めされてるからナ、ツー坊だけに言うヨ。聞くカ？」

「そりゃあ、気になるし・・・」

「だけど条件がある、それを呑まないなら、ツーク坊が聞きたがってるもうひとつの情報も話さないヨ。」

「・・・」

俺は黙って首肯した、何故か声を出してはいけない感じがしたのだ

「1つ他言一切無用、2つ必要最低限の時以外キーク坊に関わらないでやってくれ。もし一度たりと破ったら・・・私は情報屋を辞める。」

普段のアルゴの表情から一変して急に真剣な顔つきに変わり、口調も素になっていく

あのアルゴが自分の職を賭けてまで俺に伝える秘密の情報、一体どんな情報だというのか

「分かった、約束しよう。」

「全てが始まったあの日、私は一人の女性プレイヤーと出会ったの。」

アルゴは淡々と回想を語り始める

「彼女は全てが始まる前、あの茅場に出会ったそうなの。」

「あの茅場が!?またどうして・・・」

「彼は彼女にはた迷惑な贈り物を残していった。」

「と、言いますと?」

「スキルよ、それもゲームバランス崩壊も良いところのチートスキル。」

「か、獲得条件は？」

「多分存在しないわ、彼女曰くバグの産物らしいの。」

「そうか・・・チートスキル持ちなら攻略組に一人くらい欲しいと思っただけだな。」

「残念だけでもしこれが普通にクエストによる獲得スキルだとしても誰も取らないわよ。むしろ攻略組なんて入らないわ。」

「へ？」

「確かにこのスキルはチートスキル。だけどね、致命的なデメリットが存在するの。」

「・・・それは？」

「武器が持てないのよ、しかも戦闘系スキルの獲得も不可能、だから戦闘は出来ないの。」

「おいおい・・・致命的どころの騒ぎじゃねえぞ、今までどうやって生きてきたんだ？まさか死んでしまったとか言わないよな？」

「生きてるわ、＼あの＼のおかげでね。話を戻すけど、茅場によるデスゲーム宣言をした後、私は彼女を連れて＼彼＼がいるであろう道を進んでいったの。」

「まさかその彼って・・・」

「そうよ、キー坊の事。彼の人一倍お人好しなのは知ってたからね。」

「キリトだけなのか？パーティーとか他に手段があっただろ？」

「そうね・・・ツーフ坊は無垢だから仕方ないわ。確かにパーティーの方が効率や生存確率は高まるかも知れない、けどダメなのよ。」

「・・・」

彼女の真剣な眼差しに「何が？」と聞くことはならなかった

「コンビを組ませたのは彼女のスキルにも大いに関係があるの、そのスキルはコンビ時に最大の効力が発揮されるのよ。」

「まさかキリトが攻略組に入らない理由って・・・」

「そう、キー坊は戦闘も出来ない荷物同然の彼女を連れて生きていく事を決めたの。彼は悩んだと思う、スキルの加護があるとはいえ一人を守りながらモンスターと対峙しなきゃいけないからね。」

「ちよ、ちよ待てよ。まさか一緒にフィールドに出てるのか!？」

「ええ、最初はキー坊も彼女にそれを提案したわ、けど彼女がそれを拒否した。そしてそれを彼も受け入れた。だから今に至るの。」

「・・・」

俺は声もでなかった、一人のプレイヤーに押し付けられた重荷、そして彼女の命を背負うことを決めた一人の剣士

自分の想像していたことの遥か上をいく真相に何も言うことは出来なかった

「さて・・・二つ目の質問、キー坊の元相棒についてよね。」

「ああ。キリトとの関係とか知っている限りで教えてくれると助かる。」

本音を言えば、あまり人のリアルを詮索することは気が引けるけど聞かない限りは俺の心のモヤモヤが消えないのだ

「・・・私も彼らの全ては知らない。確かにキー坊にはリアルでも知り合いい。けど、それも最近だから彼らの出会いとかは全く分からない。それでもいい?」

「ああ。」

「彼らは小学生からの知り合いらしいの、けど何かの拍子で彼らは仲良くなり、ゲームという共通趣味をもって彼らは私と知り合った。それぐらいかな。」

「・・・そっか、サンキユ。」

「悪いナ、あまり力になれなくテ。」

「いいよ、それだけ知れただけでも収穫さ。」

あの二人の仲の良さはゲーム内だけの上部だけの関係じゃない、仮想空間とはまた別のもっと広い世界、現実世界からの知り合いとでもいわんばかりの絆があった

目がもう1つあるかと言わんばかりのずば抜けた空間把握能力と、未来を見てるのかレベルの判断力、常に最善の手を見いだす頭脳、そして極めつけが素の戦闘能力までトッププレイヤー、絵に描いたよう

なゲーマーだった

「……やはり知り合いだったのか。」

頭の中の霧が少しだけ晴れた気がした、けどそれでも何か肝心な所は思いだせなかった

・・・

NO side

例え己が全てを失ってでも君を救えるのなら、我が魂をも君に捧げ
ん

「……」

35層、未踏の地である森林のフィールドの湖の畔に一人の女性は
現れる

彼女は他のプレイヤーとは異なり、背中には天使とは違う言うなれ
ば竜の翼と言うべきの二枚の翼を付けていた

その後、彼女の隣に一人の白衣の男性も現れる

「私にチャンスをください、大変感謝いたします。」

「本当にいいのかね？確かにここに居れば彼に出会えるかもしれない
い。だが、君は死ぬかも知れないんだぞ？」

「百も承知です、彼の力になれるのならこの命、投げ出す覚悟です。」

「そうか、君の健闘を祈っているよ。」

そして、彼はすうっと消えていった

「・・・頑張つてここまでたどり着いてね、——」。

後に彼女はプレーヤーに影響を与えるのだが、それはまた後の話